

チェコにおける観光客流動の変化 —東欧改革前後を比較して—

呉 羽 正 昭

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> I はじめに <ul style="list-style-type: none"> I-1 研究目的 I-2 研究方法とチェコの観光資源の概観 II 東欧改革以前の観光客と宿泊施設の動向 <ul style="list-style-type: none"> II-1 第一次世界大戦前・戦間期 II-2 社会主義時代 <ul style="list-style-type: none"> 1) 訪問客の動向 2) 宿泊施設と宿泊客の動向 3) 宿泊客の地域的分布 III 社会主義時代のチェコ人の旅行行動 | <ul style="list-style-type: none"> IV 東欧改革以後の観光客数および宿泊施設の変化 <ul style="list-style-type: none"> IV-1 外国人観光客の増加 IV-2 外国人観光客の流動 IV-3 宿泊施設とその利用者の変化 IV-4 観光客の分布 <ul style="list-style-type: none"> 1) 宿泊客の地域的分布 2) 宿泊客の出発地との関係 V 東欧改革以後のチェコ人の旅行行動の変化 VI まとめ |
|--|--|

キーワード：国際観光，旅行行動，宿泊施設，観光地域，チェコ，ビロード革命

I はじめに

I-1 研究目的

社会主義政権のもとにあった中央ヨーロッパ東部地域は、1980年代後半にいわゆる「東欧改革」を経験した。それとともに観光に関する基盤は大きく変化してきた。こうした変化について筆者は、様々な点から論じてきた。その中で、当該地域におけるかつての西側諸国からの観光客の急激な増加、および中央ヨーロッパ東部地域の住民の観光旅行パターンの変化といった大きく2つの重要な問題が存在することを強調した（呉羽 2000）。後者の問題点については、旧東欧地域住民の旅行目的地としてオーストリアをとりあげ、彼らの滞在パターンの特徴を明らかにした（呉羽 1997b）。さらにその際、日帰り観光の重要性の急激な増加、都市観光の卓越およびオーストリア西部のアルプス地域における登山やスキー観光の増加を指摘した（呉羽 1997c）。また前者については、ハンガリーを例に観光客の変化とその地域的分布の特徴について明らかにした（呉羽 1988）。

本研究は、中央ヨーロッパ東部地域における観光の変化について、チェコを例に明らかにするものである。第1に、チェコ国内における観光客数の推移とその地域的分布を明らかにする。またその重要な基盤である宿泊施設の動向も明確にする。第2にチェコ人の旅行行動の変化を明らかにする。この2つの分析によって、チェコにおける観光客流動の特徴とその地域的要因を探る。

チェコの観光について分析された文献をあけておこう。梅津（1997）はチェコの観光産業について、その経済状況、通貨の問題、雇用者数などから論じているが、表面的な記述にとどまっている。また

地理学者による地誌の中で若干扱われている（中村 1987; 山本 1997）．しかし、観光産業や観光客について詳細な分析は存在しない．チェコを含む中央ヨーロッパ東部諸国、いわゆるヴィシエグラード諸国における観光の動向については呉羽（2000）にまとめられている．

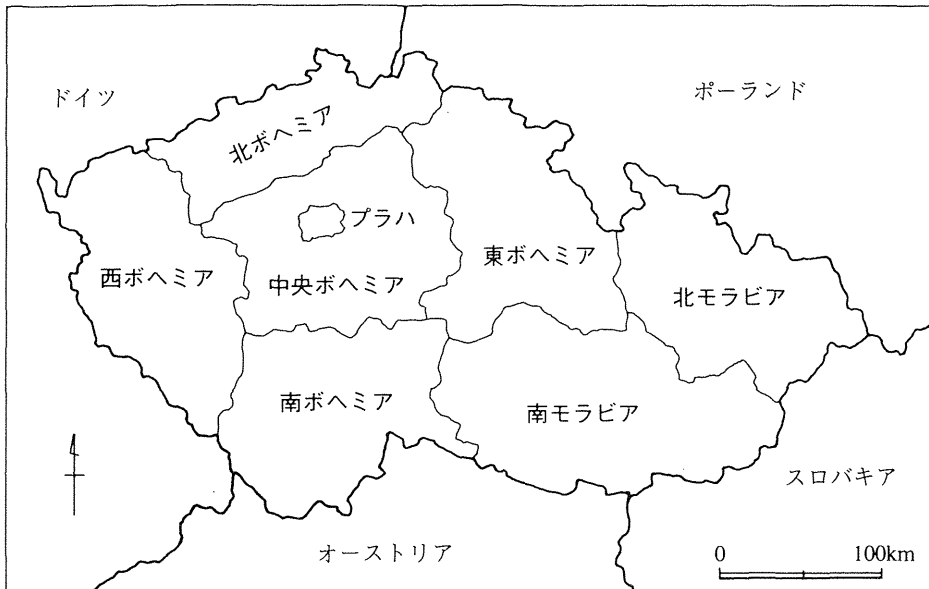
一方外国語の研究では、社会主義時代のチェコスロバキアの観光についてまとめたCarter（1991）がある．またVystoupil（1993）は、社会主義時代から1990年頃までのチェコの観光形態について論じている．一方、Johnson（1995）は、とくに改革以後に注目して、チェコとスロバキアの観光形態の特徴を示している．しかしながら、改革をはさんでのチェコの観光形態の変化に注目した分析はないといえよう．

I-2 研究方法とチェコの観光資源の概観

本研究の対象地域はチェコ共和国全体である．そのため、統計を用いた分析を主体とした．分析に用いた資料は、改革以前では、チェコスロバキア統計局が発行したチェコスロバキア統計年鑑である（Statni Úřad Statistický, Československé Socialistické Republiky 1970-1989）．また1990年から1992年には連邦統計局、チェコ統計局およびスロバキア統計局が発行した統計年鑑が発行された（Federalni Statistický Úřad, Český Statistický Úřad, Slovenský Statistický Úřad 1990-1992）．1993年以降は、チェコ統計局（Český Statistický Úřad, Czech Statistical Office）が発行した統計年鑑、および近年整備が進んでいる観光に関する部門統計である．また、一部の統計はチェコ統計局のホームページで公開されているものを利用した．ただし、1993年にチェコとスロバキアは分離したために、社会主義時代のデータにはチェコとスロバキアを分けることのできない数値もある．そのほか統計の特徴・制約については、該当する部分で説明する．

地域的差異を分析するために用いた地域単位は、行政単位であるクライKrajとオクレスOkresである．クライはボヘミア地方において、首都プラハを含めて6地区、モラビア地方に2地区存在する．第1図には1999年時点でのクライの区分を示した．さらに、クライの下位の行政単位として国内に76存在するオクレスがある．ただしプラハはクライの一単位地区でもあり、またオクレスの一単位地区でもある．なお2000年現在、これらの地方行政単位の変更が計画され一部実行に移されている．

チェコは約1000万の人口を抱える面積7.8万km²の国である．チェコには多くの観光資源が存在する．自然観光資源としては、まず国立公園（4か所）があげられる．そのうち、クルコノシェKrkonoše（ドイツ名：リーゼン山地Riesengebirge；チェコとポーランドに跨る山地；写真1）とシュマバŠumava（ドイツ名：ボヘミアの森Böhmer Wald；チェコ、ドイツ、オーストリアに跨る；Moos et al. 2000）における国立公園の規模が大きい．両者とも標高は1500m前後と低く、丘陵が展開する地形である．ここでは、登山・ハイキング、さらに冬季にはスキーがなされる．ただしスキーの場合、クロスカンントリー・スキーが中心である．チェコを流れる河川およびそのダム湖は、ウォーター・スポーツのメッカである．とくに、プラハを流れるヴルタヴァ川の上流で盛んである（写真2）．また温泉も重要な観光資源である．チェコ国内には広く温泉が分布するが、西ボヘミアのカルロヴィ・ヴァリKarlovy Vary（ドイツ名：カールスバートKarlsbad；写真3）、マリアーンスケー・ラーズニェ



第1図 チェコにおけるクライ区分図（1999年）

Mariánské Lázně（同：マリーエンバート Marienbad；写真4）およびフランチシュコヴィ・ラーズニエ Františkovy Lázně（同：フランツェンスバート Franzensbad；写真5）の3つが著名である。

人文観光資源も豊富である。とくに首都であるプラハ Praha は戦災を逃れたため、ヨーロッパのなかでも有数の、多くの文化的・歴史的要素が残された大都市の一つとなっている（写真6）。その一部はユネスコの世界遺産に指定されている。ヴルタヴァ川にかかるカレル橋（写真7）や、左岸のプラハ城（写真8）および右岸の旧市街には世界各国から観光客が訪れる（Simpson 1999）。プラハ以外でも、町並み、古城および教会など、古い建築物が全国各地に多く残されている（写真9）。なかでも、シュマバ国立公園に近いチェスキー・クルムロフ Český Krumlov の歴史地区（Moos et al. 2000）や、プラハの東部に位置するクトナ・ホラ Kutná Hora のサンタ・バーバラ教会とセドレツの聖母マリア大聖堂のある歴史都市などが有名である。両者ともに世界遺産に指定されている。

Ⅱ 東欧改革以前の観光客と宿泊施設の動向

Ⅱ-1 第一次世界大戦前・戦間期

第一次世界大戦前、チェコはオーストリア＝ハンガリー帝国の領土内にあった。当時のチェコでみられた観光の形態としては、プラハでの都市観光、西ボヘミアの温泉観光、およびクルコノシェでの山岳観光が中心を占めていた。外国人観光客も多く、とくに上層階級の外国人が訪れたという（Vystoupil 1993）。プラハでは、王宮、教会および博物館などが、歴史や文化に対する人々の好奇心をくすぐり、また由緒あるカフェやレストラン、高級ホテルなどが人目を引いたとされる（加賀美 1997）。カルロヴィ・ヴァリ、マリアーンスケー・ラーズニエおよびフランチシュコヴィ・ラーズニエなどの西ボヘミアの温泉地は、その優れた効能によって多くの人々を集めた。また第一次世界大戦前

にはドイツとの国境に位置したクルコノシェには、避暑客、登山客およびスキーツアー客が滞在していた。Poser (1939) によると、戦間期におけるドイツ領土内（現在はポーランド）のクルコノシェでは、訪問客のほとんどが夏季に集中していた。

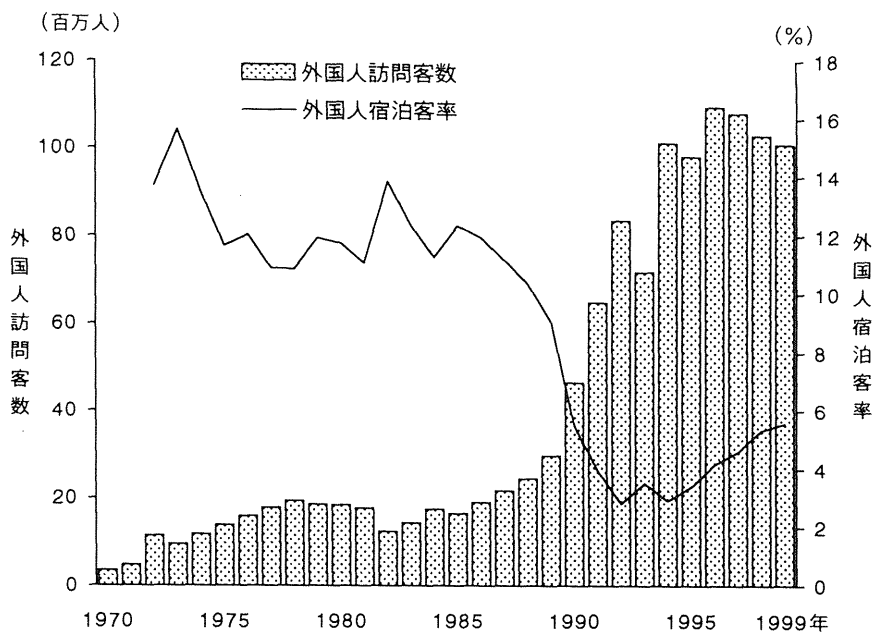
しかし Vystoupil (1993) が指摘するように、戦間期においてもすでに、ヨーロッパの西側諸国に比べて宿泊施設の面で問題点を抱えていた。それは、上記のような著名な観光地域においても、宿泊施設の質量ともに低レベルにあったことである。しかし、第一次世界大戦後、チェコスロバキアが成立した当時においても、国内外からある程度の観光客を集めていた。

II-2 社会主義時代

1) 訪問客の動向

第二次世界大戦後、チェコスロバキア共和国は社会主義体制をとることになる。これとともに、外国人観光客の動向は大きな変化を示した。すなわち、西側諸国からの観光客は著しく減少した。その結果、東側の社会主義諸国からの観光客がほとんど全てを占めるようになった。

第2図はチェコにおける外国人旅行者数の推移を示したものである。数値は当時のチェコスロバキアのチェコ領域に入国した外国人の数を示している。外国人訪問客数は、1970年には500万人弱であったが、1970年代にかなり増加し2000万人程度へと増加した。第2図には1960年代のデータは示していないが、1968年に生じた「プラハの春」による国内の混乱によって、観光客数は減少した



第2図 チェコにおける外国人旅行者数の推移 (1970～1999年)

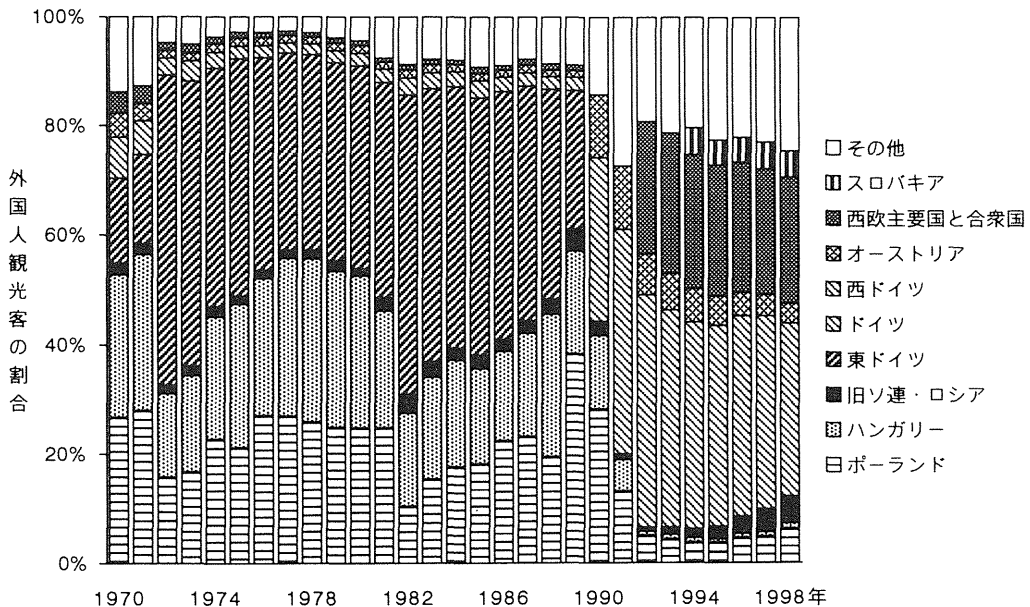
注) 1970年および1971年の外国人宿泊客率のデータなし。1992年までの数値はチェコスロバキアへの外国人訪問客数を示す。

資料：チェコスロバキア統計年鑑、チェコ統計年鑑および Český Statistický Úřad Homepage。

(Carter 1991). またこうした訪問者が、当時登録されていた宿泊施設に宿泊する割合は非常に低く、12%から14%前後を推移するに過ぎなかった(後述)。

1970年代の観光客の動向を国籍別にみてみよう。第3図はチェコスロバキアを訪問した外国人観光客の国籍別割合の変化を示したものである。これによると、1972年に東ドイツからの観光客の割合が急増したことが把握される。これはその前年になされた東ドイツの国境開放などによって同国からの訪問者が著しく増加したことによるものであろう。さらに、東ドイツとポーランドおよびハンガリーを合わせて全体の90%前後を占めており、訪問客のほとんどが社会主義諸国の住民となっていた。なかでも東ドイツからの訪問者数が最も多く、全訪問者数のほぼ半数に達していた。このように、チェコスロバキアへの訪問客のほとんどは東ヨーロッパからであったが、チェコとスロバキアの顧客圏は若干異なっていた。たとえば、ハンガリー人の多くはスロバキア領域を目的地としており(Johnson 1995)、チェコ領域にはそれほど多くのハンガリー人の訪問は認められなかった。チェコでは旧東ドイツからとポーランドからの観光客が卓越していた。この一方で、東側諸国以外では、西ドイツとオーストリアの割合が数パーセントであったに過ぎない。詳細は宿泊客の項で述べる。

1980年代になると、その前半に外国人訪問客数が減少する(第2図)。これはポーランド国内の改革によるものと考えられる。第3図を参照すると、1982年にポーランド人の割合が急激に減少している。1980年代後半には観光客数がやや増加する傾向にあった。しかし、これらの訪問客の大半は



第3図 チェコスロバキアまたはチェコにおける観光客の出発地構成の推移(1970～1998年)

注) 1. 1993年まではチェコスロバキア全体の集計。1994年以降はチェコのみを集計。

2. 1991年までは訪問客数をもとに集計。1992年以降は登録宿泊施設の宿泊客をもとに集計。

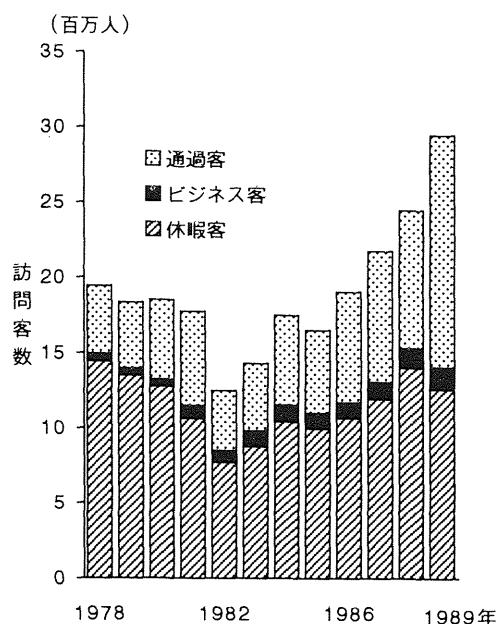
3. 1990と1991年の西欧主要国と合衆国の数値はその他に含まれる。西欧主要国とはイタリア、フランス、イギリスをさす。

資料：チェコスロバキア統計年鑑およびチェコ統計年鑑。

日帰り客または通過客であった。第2図に示したように、外国人の宿泊客率は1970年代および1980年代を通じて、12から15%前後を推移していたに過ぎない。すなわち、親戚や知人宅に宿泊する場合や、さらには多くの通過客の存在が指摘されると考えられる。訪問客を種類別に示したものが第4図であるが、データは限られた年にしか存在しない。これによると、通過客が1980年代後半に急増したことが明らかである。東欧改革に至る一連の動きの影響もあるのであろう。国籍別に検討すると、とくにポーランド人の通過客が多く、チェコスロバキアを訪れたポーランド人観光客の7割から8割が通過目的であった。この大部分は、ハンガリー、旧ユーゴスラビア、ルーマニアおよびブルガリアなどへの旅行のためであると考えられる。宿泊客率が低い理由として、データの性格によることも述べておこう。それは、宿泊客に算入されるのは、一般の観光客向けに登録された宿泊施設の利用者のみであるためである。社会主義国では、後述するように、労働組合の組合員向けの宿泊施設が多く存在した。しかし、これらの施設の利用者数は宿泊客数としてとらえられていない。ただし、一部一般の観光客も受け入れていたようである。

2) 宿泊施設と宿泊客の動向

第二次世界大戦後、宿泊施設に関する状況は大きく変化した。1950年代には、チェコ全体で国有化が進展したが、大半の宿泊施設もこれに従うことになった。とくに、従来の小規模宿泊施設（プライベート施設）の清算によって、宿泊施設数やその収容人員は、戦前の3分の1にまで減少した（Vystoupil 1993）。この傾向は、とくに中小都市と国境地域で顕著であった。国境地域の場合、ズデーテン地方からのドイツ人の退去も大きく影響している。また一部の質の良い施設は、労働組合の所有とされ、組合員の保養のために利用されるようになった。またtrade unionの組織をつくり、国を越



第4図 チェコスロバキアへの訪問客の種類別推移（1978～1989年）

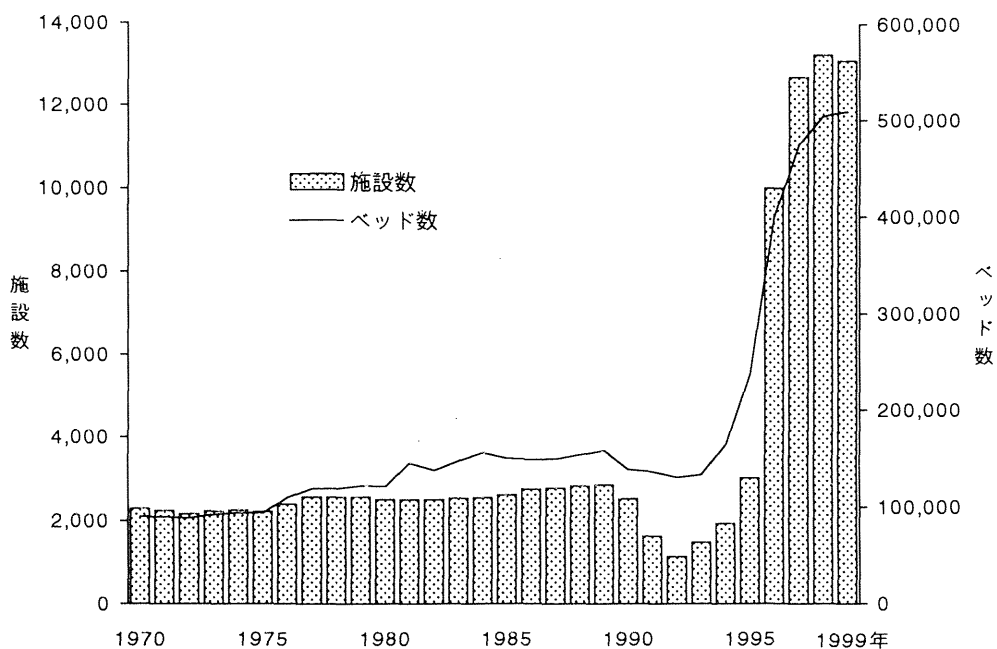
資料：チェコスロバキア統計年鑑。

えたさまざまな労働組合間での宿泊施設の相互利用も盛んになされた。一方、こうした宿泊施設の国営化とならんで、西ボヘミアでは、その主要観光資源であった温泉源泉も国有化された。

第5図は登録された宿泊施設の施設数とベッド数の推移を示したものである。施設数は1970年代および1980年代を通じ若干の増加にとどまっていた。すなわち、1970年の2283施設から1989年には2863へと増加した。しかしそれに比べると、ベッド数はかなり増加し、1970年には約9万ベッドにすぎなかったものが、1989年には16万ベッドに達した。

次に宿泊施設の種類の別の特徴をみる。第1表は、宿泊施設について種類別に様々な特徴をみたものである。改革直前の年を取り上げる場合、その影響が少なからず存在するため、1986年のデータを示した。これによると、施設数とベッド数で最も多い施設は「その他」に分類されるものであり、この多くは一般の宿泊客も受け入れていた保養所であると推測される。なぜならば、ベッド数がとりわけ多いためである。次いで、ユースホステルを中心としたホステルとなっており、比較的安価な宿泊施設が多かった。ただし利用者数では、中堅クラスのホテルが目立つ。さらに外国人の利用者割合は、ホテルのなかでも高級クラスのもので高くなる傾向が明らかである。

第6図は登録宿泊施設（営業施設）のみに関する宿泊客数（実数）の変化を表している。1970年代から1980年代に微増傾向にあり、その数値は800万人前後であった。ここで注目すべきは、宿泊客数の外国人率の低さであろう。逆に言うと、チェコ人による利用がほとんどで、7割程度を占めていた。さらに比較的安価な施設では、チェコ人の利用割合はさらに大きい（第1表）。前節1）でも述



第5図 チェコにおける登録宿泊施設数とベッド数の推移（1970～1999年）

注）1994年までは登録宿泊施設の数値のみ集計。1995年以降はプライベート施設を含む。

資料：チェコスロバキア統計年鑑、チェコ統計年鑑および Český Statistický Úřad Homepage.

第1表 チェコにおける宿泊施設の種別別特徴 (1986・1999年)

1986 年							
	宿泊施設のカテゴリー	施設数	ベッド数	施設あたり ベッド数	宿泊数	外国人 率 a)	平均 宿泊数
営業施設	ホテル 5 *	6	1,930	321.7	344,288	68.3	2.2
	ホテル 4 *	21	8,500	404.8	1,828,798	56.9	2.5
	ホテル 3 *	104	17,262	166.0	3,202,647	44.3	2.1
	ホテル 2 *	270	20,129	74.6	3,771,571	32.8	2.4
	ホテル 1 *	379	19,702	52.0	2,924,648	23.1	4.0
	Boating houses	593	14,803	25.0	1,563,175	8.9	5.6
	Hostels	729	30,066	41.2	2,819,631	11.1	3.9
	Weekend houses	242	18,279	75.5	1,545,855	17.9	3.4
	オートキャンプ施設	168	13,980	83.2	1,142,948	35.3	2.8
	その他の営業施設	244	3,883	15.9	396,851	41.5	2.8
その他		c)	188,529	c)	6,540,996	32.2	4.6
合計		2,756	337,063	122.3	26,081,408	33.6	3.2
1999 年							
営業施設	ホテル 5 *	9	4,701	522.3	856,294	92.7	2.8
	ホテル 4 *	124	22,719	183.2	3,139,313	86.5	2.6
	ホテル 3 *	701	68,856	98.2	8,089,127	60.5	3.0
	ホテル 2 *	490	45,932	93.7	4,231,018	40.9	3.4
	ホテル 1 *	396	23,694	59.8	1,706,861	26.8	3.1
	Garni-type hotels b)	88	6,107	69.4	628,678	48.9	2.8
	Boating houses	1,806	56,897	31.5	3,877,601	26.3	3.7
	Hostels	774	34,412	44.5	2,081,774	15.1	3.5
	Weekend houses	383	24,885	65.0	1,226,322	17.3	4.4
	キャンプ施設	452	23,782	52.6	3,927,733	26.6	2.6
その他の営業施設		2,264	150,141	66.3	12,584,623	20.9	7.0
プライベート施設		5,637	47,138	8.4	1,652,962	44.3	2.9
合計		13,124	509,264	38.8	44,002,306	38.3	3.7

a) 1986年の外国人率は利用者数実数に、1999年の外国人率は宿泊数に基づいている。

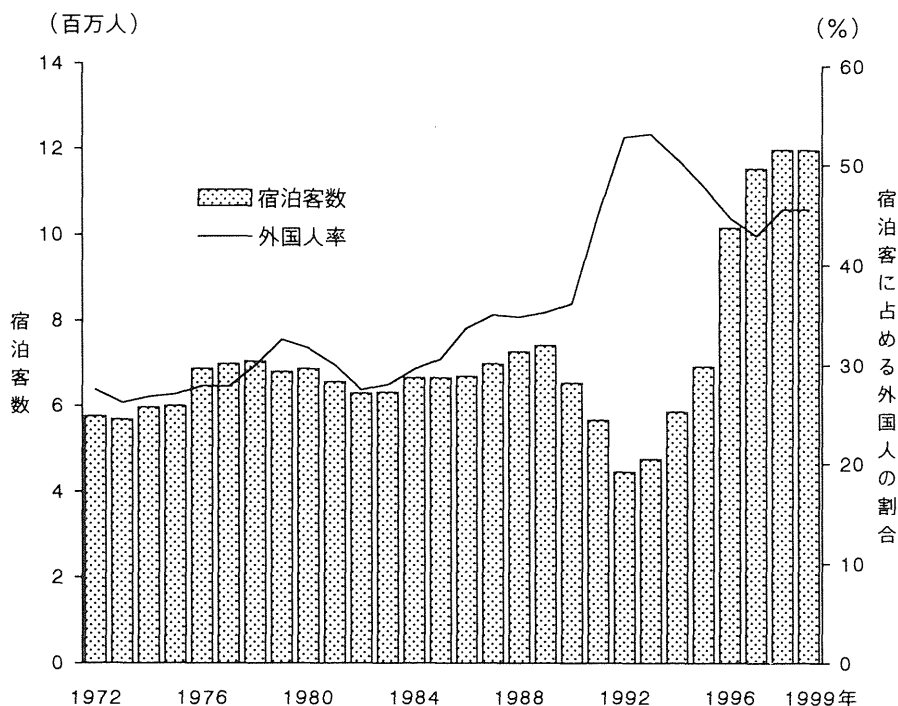
b) レストランのないホテル。

c) データなし。

資料：チェコスロバキア統計年鑑およびČeslý Statistický Úřad Homepage.

べたように、外国人観光客は日帰り形態をとるか、もしくは親戚・知人宅や労働組合所有の保養所に滞在する形態がかなり多かったのであろう。

社会主義時代のチェコスロバキアにおける西側観光客の旅行は、原則として国営旅行社であるチェドック Čedok または学生向けの国営旅行社 CKM によるものに限られていた。第7図は、チェドックを利用した旅行のチェコスロバキアでの滞在日数の推移を示したものである。1969年には「プラハの春」の影響もあり、滞在日数はのべ64万日に過ぎなかったが、その後急速に増加した。1987年に約420万日とピークに達した。1人あたりの平均滞在日数は、この期間を通じて5日前後であった。旅行者の国籍に注目すると、大半が社会主義国からの訪問客であった。なかでも東ドイツとソ連が最も多かった。これにポーランドとハンガリーが続き、この4か国で毎年7割前後を占めていた。一方、西ドイツを中心とした西側諸国からの旅行者は少なかった。1970年代前半にその割合は20%を超え



第6図 チェコの登録宿泊施設における宿泊客数の推移 (1972～1999年)

注) 登録宿泊施設における宿泊客数のみの集計

資料: チェコスロバキア統計年鑑, チェコ統計年鑑および Český Statistický Úřad Homepage.

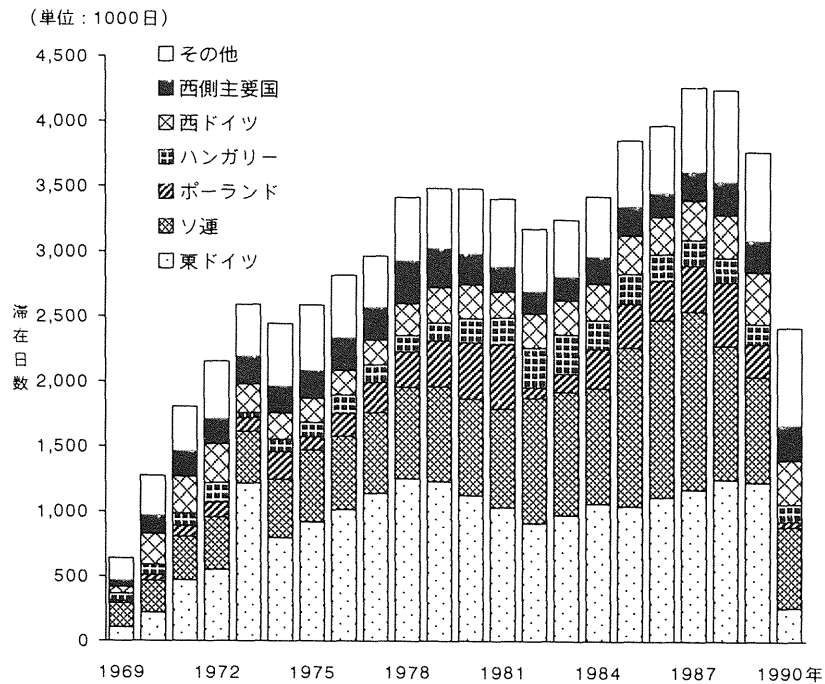
たものの、その後年々減少し、15%前後から12%程度へと減少した。しかし、改革の始まった1990年には25%へと増加した。実数では、のべ滞在日数で、50万日程度に過ぎなかった。しかし、原則として唯一の機会であったチェドックを通じたチェコスロバキアへの旅行も、宿泊施設でのサービスの悪さや、通貨両替の不便さ、さらに監視がつくなどの理由もあり、不人気であったという。

次に労働組合の保養所について述べる。統計では、これらの労働組合所有の宿泊施設全体についてまとめたものはない。第8図はチェコスロバキアにおける一部の施設のみについて、そのベッド数と利用者数の推移をみたものである。ベッド数は1968年から改革の時期まで、大きな変化はなく1万ベッド前後で推移していた。一方、利用者数は同期間、ほぼ一様に増加した。すなわち1970年前後には30万人程度であったが、1980年代後半には50万人に達するようになった。

またチェコ人にとっては、彼らの所有する別荘が、彼らの余暇行動のなかで宿泊機能として大きな役割を演じた (Vystoupil 1993)。とくに、大都市の近郊でその傾向が強かった。すなわち、首都プラハ、モラヴィア地方の中心都市ブルノ Brno、西ボヘミアの中心都市プルゼニ Plzeň の近郊には多くの別荘が集積した (Bičík 1996; Bičík and Fialová 1997)。週末や夏季には、こうした別荘が重要な滞在地となった (写真10、写真11)。

3) 宿泊客の地域的分布

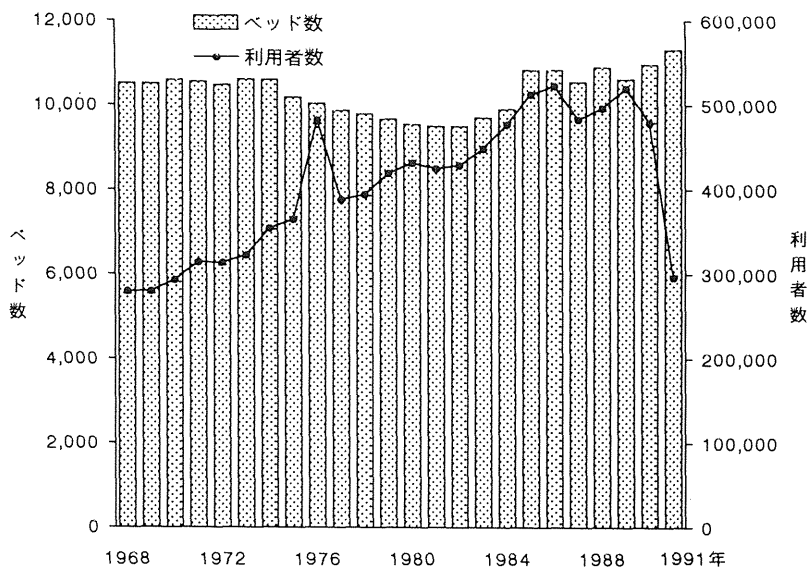
ここでは、統計年鑑に掲載された主要観光地別宿泊数のデータを用いて分析を行う。第2表は宿泊数の推移をあらわしたものである。数値は1970年から1991年にかけて存在するが、その間、すべて



第7図 チェドックを利用した外国人観光客のチェコスロバキア滞在日数の推移 (1969～1990年)

注) 西側主要国には、フランス、オーストリアおよびアメリカ合衆国が含まれる。

資料: チェコスロバキア統計年鑑。



第8図 チェコスロバキアにおける主要な労働組合保養所におけるベッド数と利用者数の推移 (1968～1991年)

注) 主要な保養所のみの集計値

資料: チェコスロバキア統計年鑑。

の年についてデータが掲載された10の主要観光地について表示した。しかし、掲載された観光地には偏りがあり、主要都市と主要温泉観光地のみとなっている。つまり、クルコノシェを中心とした山岳観光地は掲載されていないことになる。温泉地はカルロヴィ・ヴァリとマリアーンスケ・ラーズニエのみであり、残りは全て都市で、プラハを除くとどれも地方中心都市である。第9図はその分布図である。後の国籍別の分析と年次をあわせるため、1985年の数値を地図上にあらわした。

第2表をみると、いずれの観光地も宿泊数を増加させている。とくに1980年代の増加が目立つといえよう。観光地の中では、プラハへの集中傾向が顕著である（第9図）。プラハ以外ではブルノ（写真12）が第2位を占めていた。さらに年によって値は異なるが、西ボヘミアの2温泉地がそれらに続いていた。表にあげた主要観光地の宿泊数が全国のそれに占める割合は、1970年代および1980年代を通じ25%から30%程度であった。そのうちプラハが半数強を占めており、結果としてプラハにはチェコ全国の宿泊数の約15%が集中していた。

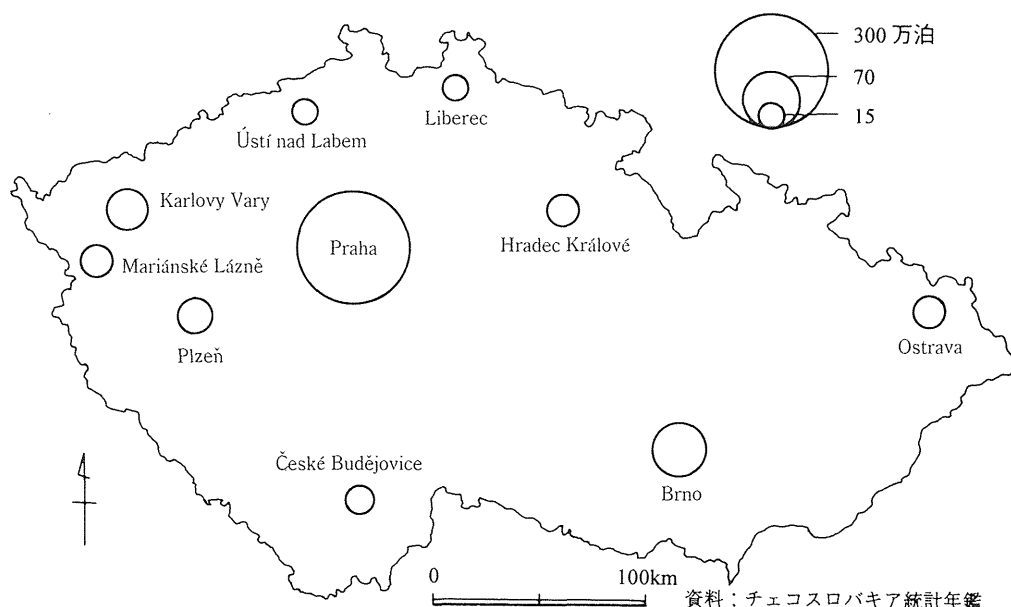
次に宿泊客の国籍に注目してみたい。第3表は、1985年における主要な3つの観光地の国籍別宿泊数をあらわしている。2)節の分析では、チェコ全体について宿泊客の7割がチェコ人であった。しかし、プラハについてはその例外で、外国人の割合が7割以上であり、さらに非社会主義諸国から

第2表 チェコの主要観光地における宿泊数の推移（1970～1991年）

年	Praha	Brno	Ostrava	Plzeň	České Budějovice	Hradec Králové	Liberac	Ústi nad Labem	Karlovy Vary	Mariánské Lazně	合計 (a)	全国宿 泊数 (b)	主要観光 地の割合 a/b, (%)
1970	2,246	522	144	112	101	72	174	108	229	193	3,901	12,685	30.8
1971	2,396	528	149	99	106	71	159	125	327	188	4,148	13,200	31.4
1972	2,725	538	161	193	125	87	145	134	368	184	4,660	15,581	29.9
1973	2,603	533	163	195	121	83	176	132	372	192	4,570	15,909	28.7
1974	2,663	569	178	197	121	86	171	129	383	215	4,712	16,931	27.8
1975	2,556	567	182	199	117	77	169	137	382	215	4,601	16,950	27.1
1976	2,752	574	203	213	124	151	173	123	400	248	4,961	18,575	26.7
1977	2,661	634	213	212	122	164	187	138	432	276	5,039	20,035	25.2
1978	2,832	672	227	217	135	191	182	167	444	268	5,335	20,427	26.1
1979	2,797	683	179	219	127	199	170	184	437	241	5,236	19,905	26.3
1980	2,831	800	218	216	128	207	173	158	388	241	5,360	20,212	26.5
1981	2,677	885	215	214	126	209	183	143	435	219	5,306	20,395	26.0
1982	2,632	653	210	210	113	213	143	142	407	211	4,934	19,661	25.1
1983	2,747	649	210	234	152	222	151	136	376	216	5,093	19,055	26.7
1984	3,127	663	214	242	174	222	162	137	396	224	5,561	23,500	23.7
1985	3,059	671	212	269	182	212	152	138	394	235	5,524	21,499	25.7
1986	3,839	934	208	343	210	251	251	126	493	286	6,941	26,081	26.6
1987	3,245	1,013	213	278	218	270	267	153	557	289	6,503	26,123	24.9
1988	3,977	1,079	236	346	243	261	263	201	549	317	7,472	28,298	26.4
1989	4,408	1,141	249	324	292	253	260	184	519	320	7,950	28,715	27.7
1990	4,524	936	219	294	297	248	254	167	415	211	7,565	24,480	30.9
1991	3,348	548	196	188	175	149	179	84	273	188	5,328	14,982	35.6

単位：千泊

資料：チェコスロバキア統計年鑑。



第9図 チェコの主要観光地における宿泊数の分布（1985年）

第3表 チェコの3大観光地における宿泊数の特徴（1985年）

宿泊客	プラハ		西ボヘミアの温泉地		クルコノシェ	
	実数	%	実数	%	実数	%
チェコ人	842	27.5	311	44.6	758	71.4
外国人（社会主義諸国）	948	31.0	299	42.9	286	26.9
外国人（非社会主義諸国）	1,269	41.5	87	12.5	18	1.7
総計	3,059	100.0	697	100.0	1,062	100.0

単位：千泊，%

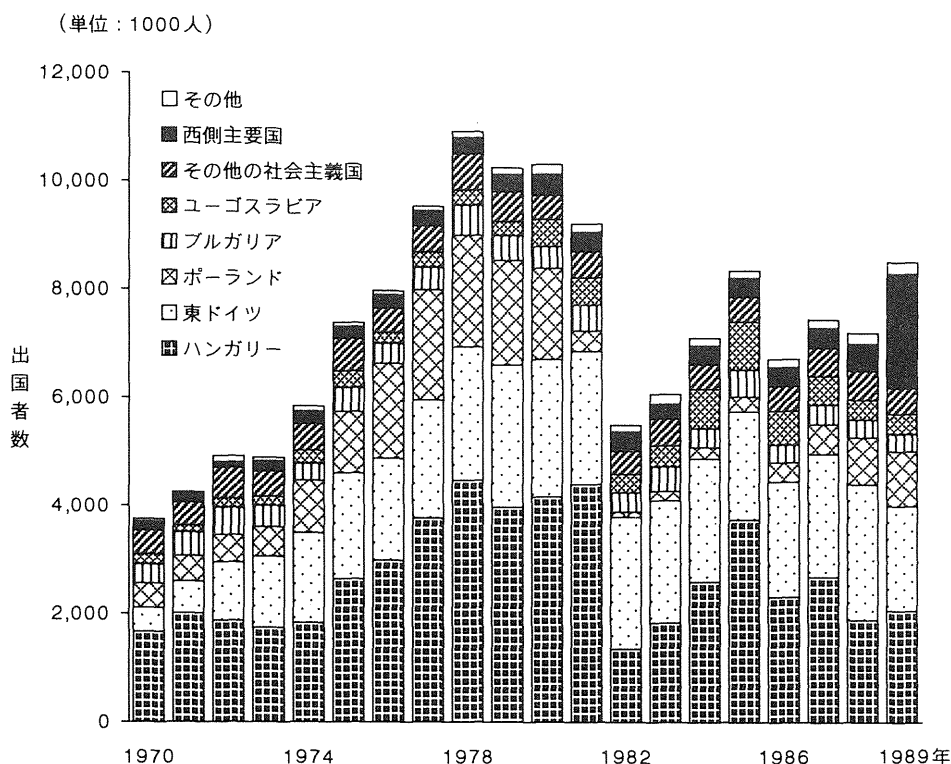
資料：Carter（1991：p.166）.

の宿泊客がその半数以上を占めていた。その一方で、西ボヘミアの温泉地やクルコノシェでは、外国人の大半は社会主義諸国からの観光客で、さらに後者については、その利用者のほとんどはチェコ人となっていた。

Ⅲ 社会主義時代のチェコ人の旅行行動

社会主義時代のチェコにおいて、訪れる観光客のほとんどが社会主義諸国からであったことと同様に、社会主義時代のチェコ人の旅行行動も、その多くは社会主義ブロック内で完結していた。こうしたテーマについての分析に関しては、2種類の統計が存在する。1つは目的地としての国別に旅行者数が明らかになっている。2つ目は、国営旅行社チェドックを利用してどこの国にどれくらい滞在したのかについてのデータがある。

第10図は、出国したチェコスロバキア人の推移を目的国別に示したものである。1970年には400万弱であった出国者数は、1978年には1000万を超えピークに達した。その後、1980年前後にはポー



第10図 チェコスロバキア人の目的地別出国者数の推移 (1970～1989年)

注) 1. その他の社会主義国には、ルーマニアおよびソ連が含まれる。

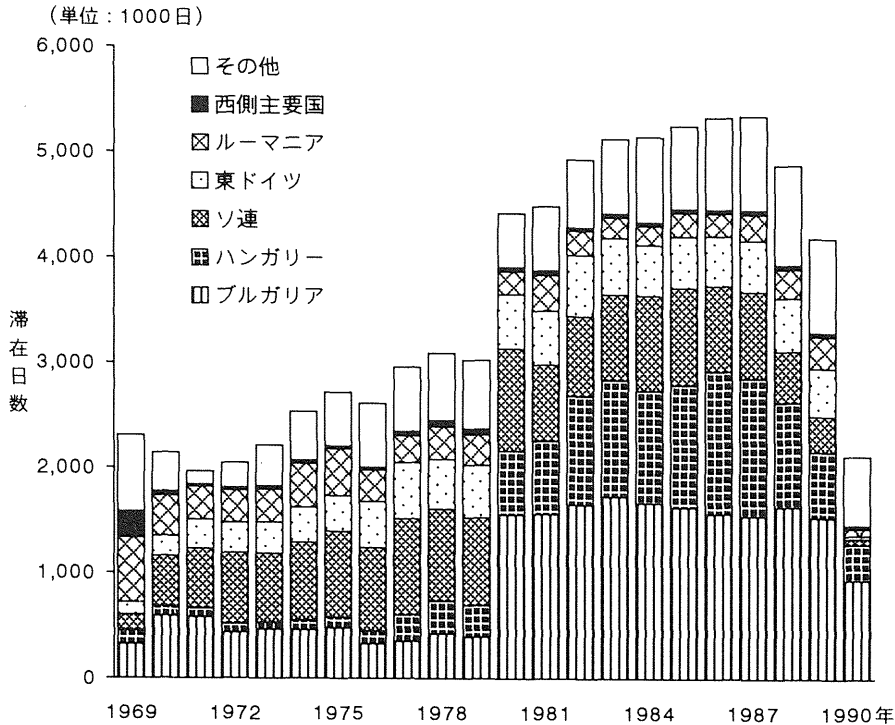
2. 西側主要国には、フランス、イタリア、西ドイツ、オーストリア、スウェーデン、イギリスおよびアメリカ合衆国が含まれる。

資料：チェコスロバキア統計年鑑。

ランド国内の動乱もあり全体の旅行者数は減少した。また、同時期ハンガリーへの出国者数も急激に減少していることが把握される。こうした1981年から1982年にかけてのチェコスロバキアからハンガリーへの旅行者の激減は、ハンガリー側の統計からも確認される。これには、当時東側ブロック内で、ハンガリーが唯一西側との協調路線を推進していたことと無関係ではないように思われる。しかし、その後はハンガリーへの旅行者数も再び増加する。こうした出国者数の減少がみられたものの、1980年代後半には700万人程度まで回復した。

チェコスロバキア人の出国者数の行き先に注目すると、毎年、社会主義国で90%以上を占めていた。とりわけ、ハンガリー、東ドイツおよびポーランドへの旅行者が多かった。これにブルガリア、ユーゴスラビア、ソ連およびルーマニアが続いている。一方、西側諸国への旅行は非常に少なかった。統計で把握されるのは、フランス、イタリア、西ドイツ、オーストリア、スウェーデン、イギリスおよびアメリカ合衆国のみであるが、全体の出国者数に対する割合は合わせても毎年ほぼ5%程度に過ぎなかった。このように、出国者のほとんどが社会主義ブロック内を目的地としていたことがわかる。

第11図は、チェドックを利用して外国旅行した際の滞在日数の推移をあらわしたものである。前



第11図 チェドックを利用したチェコスロバキア人の外国旅行の推移（1969～1990年）

注）西側主要国には、フランス、イタリアおよびオーストリアが含まれる。

資料：チェコスロバキア統計年鑑。

述の出国者数の傾向とは若干異なっている。すなわち、ブルガリア、ソ連およびルーマニアといった国での滞在日数が大半を占めている。いずれもチェコスロバキアから遠隔にある国々で、主要な目的地は黒海沿岸のリゾートであったと考えられる。こうした遠隔地では、旅行する際に個人的なつながりで宿泊施設の確保が困難な地域であったと推測される。その結果として、旅行社チェドックを利用している旅行者が多くなっているのであろう。逆に出国者数は多かったハンガリー、東ドイツおよびポーランドといった隣接する諸国では、チェドックを利用した旅行は少なくなっていた。出国者総数の分析と同様に、西側諸国への旅行は非常に少ないことが分かる。統計で把握されるのは、フランス、イタリアおよびオーストリアのみであるが、全体に対する割合は1%前後に過ぎなかった。これは、ほかの社会主義諸国と同様に、チェコスロバキアにおいても、外貨の交換制限や西側諸国への渡航制限が存在したためである。その結果として、多くの外国旅行が社会主義ブロック内へのものであった。

以上の分析はチェコ人による外国旅行のみについてである。第6図から、チェコ国内の宿泊施設における利用者に占める外国人の割合は30%前後であった。すなわち残りの70%、約400万人のチェコ人が毎年、国内の宿泊施設を利用していたことが分かる。さらに、Ⅱ章で述べたように、労働組合所有の保養所や、自己所有の別荘が多く国内に存在し、その結果として国内旅行も多く存在していたことが把握される。すなわち、チェコ人の休暇旅行のほとんどは国内も含めた社会主義諸国内で完結

していたのである。

Ⅳ 東欧改革以後の観光客数および宿泊施設の変化

Ⅳ－１ 外国人観光客の増加

1989年に始まる一連の東欧改革は、チェコの観光にも大きな影響を与えた。第2図で訪問客数についてみると、1990年頃から観光客数は急激に増加した。1980年代の後半には3000万人程度に過ぎなかった訪問客数は、1994年には1億人を超えた。すなわち一連の改革直前の3倍程度の増加を示している。しかしながら、1994年以降はその増加傾向が止まり、その後は1億人程度の訪問客数を維持している。ただし、近年若干減少傾向にある。

外国人観光客の国籍に注目すると、利用可能な数値の種類に差異がある。すなわち1991年以前は訪問客数に基づくのに対して、1992年以降は、宿泊客数（利用者数）をもとに算出した。こうした問題点はあるものの、非常に大きな変化を示した。すなわち、旧社会主義諸国からの宿泊客の割合が急激に減少したことである。第3図によると、改革以前に大部分を占めていたポーランド、ハンガリーおよび東ドイツからの宿泊客の割合は、1994年までに著しく減少し、前2者については合わせても5%程度にとどまっている。それにかわって、ドイツやオーストリア、さらには他の旧西側諸国からの客が急激に増加した。しかし、最も重要であるのは統合したドイツで、それは全外国人宿泊客の4割程度を占めている。もちろん統合以前の旧東ドイツ地域からも多くの訪問客は存在するものとみられる。また1994年以降、ロシアやポーランドといった旧社会主義諸国からの宿泊客の割合が再び増加する傾向にある。

訪問客の国籍別データは、隣接国についてのみ存在する（第4表）。これによると訪問客の8割程度は隣接国の住民である。とくにドイツ人が非常に多い。ドイツ人の割合は改革直後は半分以上を占めたが、その後減少し、40%程度を推移している。実数では毎年4千万前後のドイツ人がチェコに入国している。ドイツ人に次ぐ地位にあるのがポーランドで、入国者数は増加傾向にあり、1999年には2千万人弱に達している。その他のビザ必要国に分類される国の多くは、ヨーロッパ内にあると推察されるが、その数値は近年、減少傾向にある。

Ⅳ－２ 外国人観光客の流動

第5表は1999年における外国人訪問客の流動を示したものである。ドイツとの国境が46%と最も多く利用されており、全体の半数近くに達する。そのほとんどはドイツ人である。隣接国以外の査証不要国は、ほぼ4等分されて4つの隣接国からそれぞれ入国している。ただしこの場合、ポーランドからの入国者数が最も多い。さらにビザ必要国の場合には、実数は極端に少ないが、ドイツ、オーストリアまたは空港から入国する場合がほとんどである。

改革以後の訪問客の属性別データはないが、第2図のように、外国人観光客数の宿泊率は大きく後退した。1992年に2.8%まで減少したものの、その後は上昇傾向にある。ただし、1999年においてもはわずか5.6%である。例えばドイツ人の場合、訪問者数は4100万人であるのに対し（第4表、第5

第4表 チェコにおける外国人訪問者数の推移 (1992～1999年)

指標	年	隣接国					その他の ビザ不要国	ビザ必要国	合計
		ドイツ	オーストリア	ポーランド	スロバキア	空港 ^{a)}			
入国者数 (単位： 1000人)	1992	35,948	7,661	12,787	*	4	12,700	313	69,412
	1993	36,121	7,881	12,939	*	8	14,476	311	71,736
	1994	43,939	9,538	15,369	5,589	*	26,295	409	101,140
	1995	43,706	9,222	12,784	7,235	20	24,674	419	98,061
	1996	43,379	10,071	17,779	11,706	18	26,032	420	109,405
	1997	41,871	9,817	18,967	12,132	24	24,667	406	107,884
	1998	40,897	8,706	19,082	11,352	16	22,428	362	102,843
	1999	40,964	7,622	19,367	10,584	16	21,968	311	100,832
割合 (%)	1992	51.8	11.0	18.4	*	0.0	18.3	0.5	100.0
	1993	50.4	11.0	18.0	*	0.0	20.2	0.4	100.0
	1994	43.5	9.4	15.2	5.5	*	26.0	0.4	100.0
	1995	44.6	9.4	13.0	7.4	0.0	25.2	0.4	100.0
	1996	39.6	9.2	16.3	10.7	0.0	23.8	0.4	100.0
	1997	38.8	9.1	17.6	11.2	0.0	22.9	0.4	100.0
	1998	39.7	8.5	18.6	11.0	0.0	21.8	0.4	100.0
	1999	40.6	7.6	19.2	10.5	0.0	21.8	0.3	100.0

a) 空港を利用して入国した隣接国からの人数。空港を利用したそれ以外の入国者数は、その他のビザ不要国またはビザ必要国に含まれる。

*) データなし

資料：チェコ統計年鑑および Český Statistický Úřad 2000a.

第5表 チェコにおける外国人訪問客の流動 (1999年)

指標	国境	隣接国	その他の ビザ不要国	ビザ必要国	合計
入国者数 (1000人)	ドイツ	40,964	5,297	108	46,369
	オーストリア	7,622	4,706	61	12,389
	ポーランド	19,367	6,575	19	25,962
	スロバキア	10,584	4,062	28	14,674
	空港	16	1,327	95	1,438
	合計	78,553	21,968	311	100,832
割合 (%)	ドイツ	52.1	24.1	34.8	46.0
	オーストリア	9.7	21.4	19.6	12.3
	ポーランド	24.7	30.0	6.2	25.7
	スロバキア	13.5	18.5	9.1	14.6
	空港	0.0	6.0	30.3	1.4
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0

資料：Český Statistický Úřad 2000a.

表)、宿泊客数は165万人であり、宿泊者率は4%に過ぎない。すなわち通過客や日帰り客が多くを占めることが、その理由として考えられる。また、ハンガリーでみられたような非登録の宿泊施設(呉羽1998)が多く存在するとも考えられる。さらに、課税をおそれた宿泊施設経営者が、宿泊客数を過小に申告しているという事実の存在も考慮する必要がある。たとえば、西ボヘミアの温泉地マ

リアーンスケー・ラーズニエの温泉管理会社での聞き取りによると、入湯税関係の統計も含めて、宿泊客数はかなり過小評価されているという。

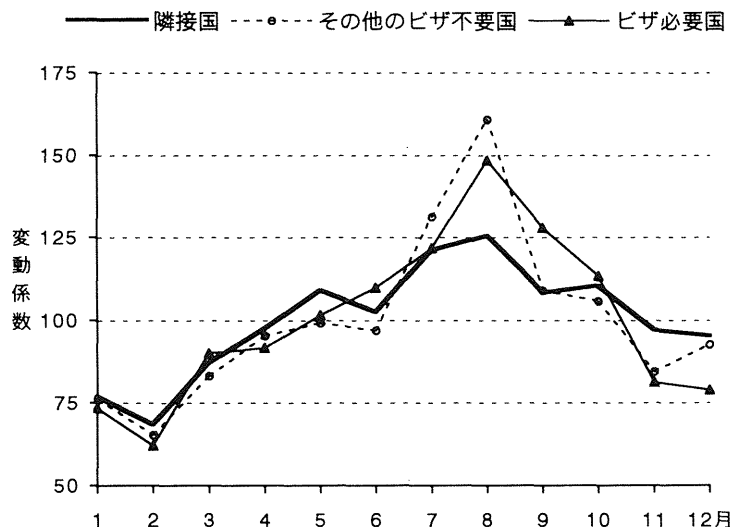
Johnson (1995) は、チェコスロバキアを訪れた観光客に対する滞在期間調査の結果を引用している。これによると、その55%が日帰り客、1泊の宿泊客が21%に達していた(1992年)。さらに、2泊が11%、3泊以上は13%であった。このように、かなりの数にのぼる日帰り客の存在が指摘される。呉羽(1997b)が示したように、買い物や飲食などを主目的とした日帰り観光が主体となっているものと予想される。

外国人訪問客の月別変動をみたものが第12図である。全体としては夏季に集中する一季型に近い形態になっている。夏季の観光シーズンに多くの観光客が訪れる結果であろう。しかし、国々がおかれたチェコとの位置関係に注目すると差異が存在する。隣接国では、夏季のピークが小さくなっており、逆にそれ以外の国々では8月にピークが存在する。すなわち、隣接国からはほぼ1年を通じて訪問客が存在することを物語っているといえよう。したがって、隣接諸国の住民については、上述したような日帰りや週末を利用したチェコへの旅行が季節を問わずなされているのではないかと予測される。逆に遠方諸国の観光客は、夏季のバカンスを利用した旅行が主体となっているものと考えられる。

IV-3 宿泊施設とその利用者の変化

社会主義体制の確立とともになされてきた宿泊施設の国有化、もしくは労働組合による所有形態は、ビロード革命の進行とともに本質的な変更を余儀なくされた。

まず施設数およびベッド数の推移をみておこう。第5図によると、改革以後の施設数の減少がみら



第12図 チェコにおける外国人訪問者数の月別変動 (1999年)

注) 各月の変動係数 = $100 \times (\text{当該月の訪問客数}) / ((\text{年間訪問客数}) / 12)$

資料: Český Statistický Úřad 2000a.

れる。1989年には約2800施設存在したものの、1992年には1100まで減少した。しかしその後は急激な増加傾向を示し、1995年に改革以前のレベルに達した。1996年以降、急激な増加を示しているが、これは、宿泊施設関係の統計にプライベート施設が算入されたためである。すなわち、1995年までは、営業許可のある登録施設のみが集計されている。後述するように、1990年代前半にも多くのプライベート施設が設立されている。したがって統計の把握が遅れていると考えられる。プライベート施設が算入された結果、施設数は1997年に13000弱に達し、その後は大きな変化がない。これは宿泊施設数が飽和状態に近づいたと予測される。ベッド数の推移についてもこれとほぼ同様の傾向を示している。改革直後の期間の減少については、統計の問題とも関係があろう。すなわち改革が進む際に、既存施設の民営化が急速になされ、それに統計把握が遅れたのではないかと考えられる。しかしより本質的には、施設の改善のために一時期営業ができなかった宿泊施設も多く存在するのであろう。さらにこうした既存宿泊施設の動向に加えて、プラハや地方都市でホテルの新設が相次いだ（Johnson 1995）。その結果として施設数やベッド数の増加がみられる。

第6表はチェコに1999年に存在した宿泊施設の開設年を示したものである。これによると、開設

第6表 チェコにおける宿泊施設の開設年^{a)} (1999年)

指標	開設時期	ホテル	ホテル以外の 営業施設	プライベート 施設	合計
施設数 (軒)	1989年以前	430	1,887	439	2,756
	1990年	109	345	300	754
	1991	136	316	511	963
	1992	200	471	1,147	1,818
	1993	194	474	645	1,313
	1994	187	386	386	959
	1995	148	351	302	801
	1996	119	272	159	550
	1997	76	168	79	323
	1998	51	99	16	166
	1999	17	63	14	94
	不明	141	847	1,639	2,627
	合計	1,808	5,679	5,637	13,124
開始時期 別割合 ^{b)} (%)	1989年以前	25.8	39.2	11.0	26.3
	1990年	6.5	7.1	7.5	7.2
	1991	8.2	6.5	12.8	9.2
	1992	12.0	9.7	28.6	17.3
	1993	11.6	9.8	16.0	12.5
	1994	11.2	8.0	9.7	9.1
	1995	8.9	7.3	7.6	7.6
	1996	7.1	5.6	4.0	5.2
	1997	4.6	3.5	2.0	3.1
	1998	3.1	2.0	0.4	1.6
	1999	1.0	1.3	0.4	0.9

a) 1999年に存在する13124の宿泊施設に関する開設年。

b) 割合の母数には合計から不明の軒数を除いてある。

資料：Český Statistický Úřad 1999a。

年を不明とする宿泊施設が5分の1ほど存在するが、いくつかの特徴が明確になる。第1に、改革以前から存在する宿泊施設が4分の1程度に過ぎないことである。つまり7割以上は改革以後に新規開設されている。第2に、1992年から1994年にかけて施設新設のピークが存在することである。第3に、プライベート施設の新設が非常に多いことである。とくに1992年には1100軒あまりのプライベート施設が全国で新規立地した。

宿泊施設の利用者は、施設数の動向と同様に、改革直後に減少を示した。しかし、その後急激に増加し、1997年以降は1200万人程度を推移している（第6図）。今後も大きな増加はみられないであろう。改革直後の減少は上述した施設数の場合と同じく、民営化の過程で統計把握の遅れおよび施設の改装が影響しているものと予測される。宿泊施設数と同様に1995年から1996年にかけての増加が著しいが、これは1995年までの利用者数が全ての宿泊施設を対象としていないためである。また第6図には、宿泊客数に占める外国人の割合の推移も示した。1992年と1993年には50%を超えていたが、その後その割合は減少している。近年では45%前後で推移している。

次に、第1表に基づいて宿泊施設の種別の特徴を述べる。ここでは、1999年の状況を改革前の1986年のそれと比べて特徴を記述していく。ベッド数の変化に注目すると、4から2星のホテルおよびボーディングハウスでの増加が著しい。これは上述したように当該施設の新設によるところが大きいと考えられるが、施設の設備の改善などによって他のクラスから移動してきた例も存在するであろう。施設あたりのベッド数は多くの場合減少しており、小規模化の傾向にあることが把握され、設備の質的な向上も進んでいる。宿泊数については、施設の種別の割合を考えると、中堅クラスのホテルでの値が非常に大きい。またホテルでは全般に外国人の宿泊数の割合がかなり増加している。このほか1999年の「その他の営業施設」のクラスが最も多くの施設数、ベッド数および宿泊数を記録しているが、これは平均規模も比較的大きく、改革以前「その他」に分類された保養所関係の宿泊施設が該当すると考えられる。

第7表は、宿泊施設の地域的差異を分析するため、そのベッド数をクライ別に示した。最もベッド数が多いクライは東ボヘミアである。前述したように、ここには山岳観光地クルコノシェが存在する。これにプラハが続いている。宿泊施設の種別に検討すると、プラハでホテルが卓越している。一方、それ以外のクライではその他の営業施設が卓越している。ただし、多くの著名温泉地が存在する西ボヘミアではホテルの割合がやや高い。プライベート施設は、ボヘミアの森をかかえる南ボヘミアと、上記の東ボヘミアで卓越するという特徴がある。

IV-4 観光客の分布

1) 宿泊客の地域的分布

ここでは、チェコにおける観光客数の地域的分布について分析していく。第8表は1999年における宿泊客数、宿泊数および平均宿泊数についてクライ別に示したものである。チェコ全体で宿泊客数は1200万人、宿泊数は4400万泊に達し、平均宿泊数は3.7泊となる。クライ別に検討すると、宿泊客数、宿泊数ともにプラハに集中していることが明らかである。しかし、滞在期間は平均で3泊と最も

第7表 チェコにおけるクライ別宿泊施設のベッド数 (1999年)

指標	クライ	ホテル	ホテル以外の 登録施設	プライベート 施設	合計
ベッド数	Hlavní město Praha プラハ	45,512	31,005	3,318	79,835
	Středočeský 中央ボヘミア	13,060	21,199	3,368	37,627
	Jihočeský 南ボヘミア	9,899	36,846	9,304	56,049
	Západočeský 西ボヘミア	20,570	27,783	5,068	53,421
	Severočeský 北ボヘミア	16,236	38,735	5,988	60,959
	Východočeský 東ボヘミア	22,654	58,610	12,452	93,716
	Jihomoravský 南モラビア	22,801	40,363	4,596	67,760
	Severomoravský 北モラビア	21,277	35,576	3,044	59,897
	チェコ合計	172,009	290,117	47,138	509,264
ベッド数 の割合 (%)	プラハ	57.0	38.8	4.2	100.0
	中央ボヘミア	34.7	56.3	9.0	100.0
	南ボヘミア	17.7	65.7	16.6	100.0
	西ボヘミア	38.5	52.0	9.5	100.0
	北ボヘミア	26.6	63.6	9.8	100.0
	東ボヘミア	24.2	62.5	13.3	100.0
	南モラビア	33.6	59.6	6.8	100.0
	北モラビア	35.5	59.4	5.1	100.0
	合計	33.6	57.1	9.3	100.0

資料：ČeskýStatistickýÚřad 1999a.

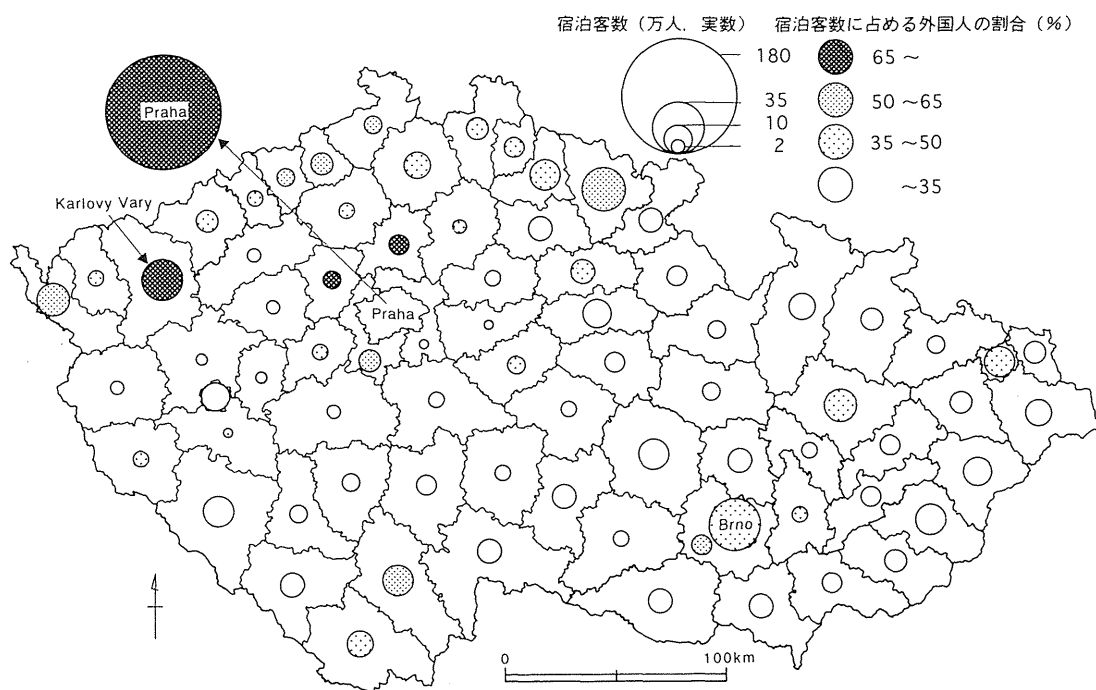
第8表 チェコにおける宿泊客のクライ別分布 (1999年)

KRAJ クライ	宿泊客数			宿泊数			平均宿泊数 (泊)
	実数 (千人)	クライ別割合 (%)	外国人率 (%)	実数 (千泊)	クライ別割合 (%)	外国人率 (%)	
プラハ	2,741	22.9	76.0	8,326	18.9	72.1	3.0
中央ボヘミア	905	7.5	39.7	2,976	6.8	33.2	3.3
南ボヘミア	1,202	10.0	35.3	4,395	10.0	26.1	3.7
西ボヘミア	1,239	10.3	46.0	5,667	12.9	40.8	4.6
北ボヘミア	1,203	10.0	39.5	4,496	10.2	30.3	3.7
東ボヘミア	1,884	15.7	37.8	7,512	17.1	29.7	4.0
南モラビア	1,539	12.8	36.8	5,116	11.6	29.5	3.3
北モラビア	1,303	10.8	32.2	5,514	12.5	23.7	4.2
チェコ合計	12,016	100.0	46.7	44,002	100.0	38.3	3.7

資料：ČeskýStatistickýÚřad Homepage

短くなっている。またプラハにおいて、宿泊客数および宿泊数からみた外国人率が最も高い。次いで、東ボヘミアで両指標とも多くなっている。外国人率では温泉地をかかえる西ボヘミアでプラハに次いで高い。さらにここでは滞在日数が4.6泊と最も長くなっている。

第13図は宿泊客数の分布をオクレス別にあらわしたものである。ここでいう宿泊客は登録された宿泊施設を利用した人数の実数である。この図は1995年とやや古い時期の状況を示したものであるが、分布傾向はその後大きく変化していない。最も大きな特徴は、首都プラハへの宿泊客のかなりの集中である。実数では約180万人であり、これはチェコ全国の宿泊客数の26%にあたる。改革前の1985年には、その値は14%に過ぎなかった（第9図、第2表）。基礎になる指標が宿泊数と宿泊客数（第13図）とで異なるものの、プラハへの集中傾向が強まっている。ただし、1999年には宿泊客数からみた割合は23%、宿泊数からみた割合は19%と若干低下する傾向にある。プラハには多くの外国人観光客が集中するため、プラハへの集中傾向があらわれたと考えられる。プラハの全宿泊客数に占める外国人の割合は、全オクレス中最も高く76%程度に達する。ボヘミア地方では、プラハのほかには西ボヘミアの温泉地および東ボヘミア北部のクルコノシェで宿泊客数が多い。先に述べたが、西ボヘミアには、カルロヴィ・ヴァリ、マリアーンスケー・ラーズニェおよびフランチシュコヴィ・ラーズニェの3大温泉保養地が存在し、多くの保養客や観光客を集めている。とくにカルロヴィ・ヴァリでその値が大きく、さらに外国人率も大きい（第13図）。一方、山岳観光地のクルコノシェではチェコ人による利用が中心となっている。モラヴィア地方では、その中心都市であるブルノで宿泊客が多い



第13図 チェコにおける宿泊客数の分布（1995年）

資料：Český Statistický Úřad 1996.

傾向が読みとれる。ただし、ここでもチェコ人の利用が半数以上を占めている。

2) 宿泊客の出発地との関係

次に、宿泊客の分布をその国籍と関連づけて分析する。第9表は国籍別の宿泊客数および宿泊数に基づいて、クライ別にその順位と割合を示したものである。チェコ全国では、2つの指標ともにチェコ人の割合が半数を超えている。また全てのクライにおいてもチェコ人の割合が第1位である。しか

第9表 チェコにおけるクライ別宿泊客の国籍別順位と割合 (1999年)

指標	クライ	第1位	第2位	第3位	第4位	第5位	その他
宿泊客数	プラハ	チェコ 24.0	ドイツ 15.3	イタリア 6.4	イギリス 6.1	アメリカ合衆国 5.0	43.2
	中央ボヘミア	チェコ 60.3	ドイツ 11.8	オランダ 3.5	ポーランド 3.2	スロバキア 2.1	19.1
	南ボヘミア	チェコ 64.7	ドイツ 11.9	オランダ 3.1	ポーランド 2.3	オーストリア 1.7	16.3
	西ボヘミア	チェコ 54.0	ドイツ 19.7	ポーランド 3.1	ロシア 2.5	オランダ 2.4	18.3
	北ボヘミア	チェコ 60.5	ドイツ 14.8	ポーランド 3.0	スロバキア 2.3	オランダ 2.3	17.1
	東ボヘミア	チェコ 62.2	ドイツ 15.0	ポーランド 3.2	オランダ 2.5	スロバキア 2.0	15.1
	南モラビア	チェコ 63.2	ドイツ 10.1	ポーランド 4.1	スロバキア 2.4	オーストリア 2.0	18.2
	北モラビア	チェコ 67.8	ドイツ 9.5	ポーランド 3.9	スロバキア 2.5	オランダ 1.6	14.7
	チェコ合計	チェコ 53.3	ドイツ 13.8	ポーランド 3.2	イタリア 2.7	イギリス 2.4	24.6
宿泊数	プラハ	チェコ 27.9	ドイツ 15.4	イタリア 6.5	イギリス 5.5	アメリカ合衆国 5.2	39.5
	中央ボヘミア	チェコ 66.8	ドイツ 12.1	オランダ 3.4	ポーランド 2.2	スロバキア 1.7	13.8
	南ボヘミア	チェコ 73.9	ドイツ 11.0	オランダ 2.6	ポーランド 1.6	スロバキア 1.1	9.8
	西ボヘミア	チェコ 59.2	ドイツ 23.4	ロシア 3.9	オランダ 1.5	ポーランド 1.3	10.7
	北ボヘミア	チェコ 69.7	ドイツ 14.0	ポーランド 2.0	オランダ 1.8	スロバキア 1.7	10.8
	東ボヘミア	チェコ 70.3	ドイツ 15.2	ポーランド 2.3	オランダ 2.0	スロバキア 1.3	8.9
	南モラビア	チェコ 70.5	ドイツ 10.2	ポーランド 2.7	スロバキア 2.1	オランダ 1.7	12.8
	北モラビア	チェコ 76.3	ドイツ 9.0	ポーランド 2.8	スロバキア 2.2	オランダ 1.2	8.5
	チェコ合計	チェコ 61.7	ドイツ 14.2	ポーランド 2.1	オランダ 2.0	イタリア 2.0	18.0

資料：Český Statistický Úřad Homepage.

単位：%

し、クライ別にみると差異が存在する。第13図でも確認できるように、プラハおよび西ボヘミア以外のクライでは、チェコ人の割合が非常に大きい。こうした傾向は、近年高まりつつある。第6図でみたように、宿泊客数に大きな変化はなく、さらに外国人の割合が下がっているためである。とくにプラハでこの特徴があらわれている。すなわち、1995年には宿泊客数からみたチェコ人の割合は14.8%、宿泊数の場合13.1%であったが、1999年には、それぞれ24%と27.9%へと増大している。これは、チェコにおいて政治・経済の機能がプラハに著しく集中しているため、ビジネス客の割合が大きいという結果があらわれたものであろう。

外国人宿泊客に注目すると、どのクライにおいてもドイツ人の割合が最も高い。チェコ人とドイツ人の割合をあわせると、プラハを除いて、その値は7割から8割に達する。これらに続くのは、ポーランド、オランダおよびスロバキアなどである。とくにポーランドの占める割合が大きい。またそれぞれのクライに国境で接する国の割合も高くなっている。こうした近接効果は、隣接国全てについてみられる傾向である。西ボヘミア、東ボヘミアおよび北ボヘミアでは、ドイツ人が非常に多い。さらに南ボヘミアと南モラヴィアではオーストリアがランクに入る。ポーランドとスロバキアの場合は、過去の歴史的な経緯からほとんどのクライで5位以内に入っている。また西ボヘミアではロシア人の宿泊客が多くみられるが、このほとんどはカルロヴィ・ヴァリの保養客である。

宿泊客の国籍構成では、プラハが例外的な存在であったが、プラハの場合外国人の多様性に特色があり、様々な国から多くの観光客が訪れる。1999年において、外国人の中で最も多いのはドイツ人（42万人；128万泊）であるが、これに次いでイタリア（18万人；54万泊）、イギリス（17万人；46万泊）、アメリカ合衆国（14万人；43万泊）、スペイン（12万人；37万泊）となっている。しかし都市観光地の性格として、平均滞在期間が短くなっている。平均宿泊数は、国内平均では3.7泊であるのに対して、プラハでは3.0泊である（第8表）。一方、温泉地をかかえる西ボヘミア、さらにはクルコノシェを擁する東ボヘミアで滞在期間がやや長くなる傾向にある。

V 東欧改革以後のチェコ人の旅行行動の変化

以上のようなチェコへの西側観光客の増加に加えて、チェコ住民の西側への旅行が増加していく。ここでは、この点について検討する。

Ⅲ章でみたように、改革以前のチェコ人の旅行先は、社会主義ブロック内ではほぼ完結していた。しかし、1989年以降、旅行市場の規模は大きく拡大し、また旅行先も大きく変化した。第10表は、チェコ人による外国旅行数を国境別に示したものである。のべ外国旅行者数は1992年には約3300万人へ、さらに1996年には約4900万人へと急激に増加し、ピークを迎えた。1996年の時点では、1988年に比べて、市場規模は約7倍に拡大している。このデータでは旅行目的地は不明で、どの国境から出国したかのみ把握できる。1992年と1993年ではドイツとオーストリアへの出国が非常に目立っていた。しかしその後、出国者数はそれぞれ減少を示した。その一方で、ポーランドへの出国が急激に増加し、1996年以降最も多くなっている。しかし1997年からチェコ人による外国旅行数は減少を示している。1999年には約4000万まで減少した。とくにポーランド方向への出国減少が著しい。

第14図は、チェコ人による外国旅行数の月別変動を示したものである。全体としてはやや夏季に多い傾向を示している。ただし、オーストリア方向への出国が7月と8月に非常に多いという特徴がある。スロバキアおよび空港の場合もこれと類似した性格を示す。これらは、夏季のバカンスの時期に当たり、地中海方面への外国旅行が卓越する結果であろう。一方、ポーランドとドイツの場合には、

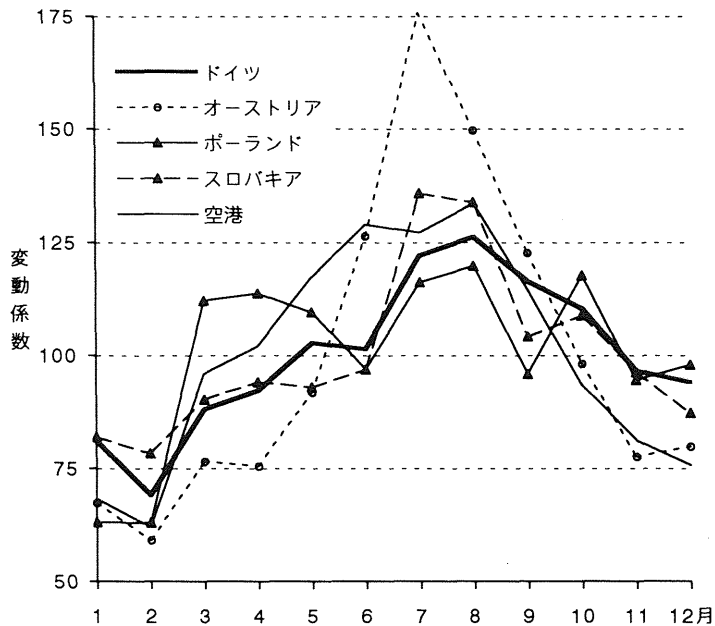
第10表 チェコ人による外国旅行数の国境別推移 (1992～1999年)

指標	国境	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
外国旅行数 (千人・回)	ドイツ	17,552	16,497	17,446	16,131	14,207	12,461	11,808	10,898
	オーストリア	9,044	7,415	8,422	7,284	7,257	7,070	6,808	6,640
	ポーランド	5,452	6,509	14,168	14,925	17,211	15,531	14,632	12,187
	スロバキア	*	*	5,268	6,248	9,403	9,815	8,954	8,866
	プラハ空港	624	559	541	284	536	1,193	1,406	1,386
	合計	32,672	30,981	45,845	44,873	48,614	46,070	43,608	39,977
国境別割合 (%)	ドイツ	53.7	53.2	38.1	35.9	29.2	27.0	27.1	27.3
	オーストリア	27.7	23.9	18.4	16.2	14.9	15.3	15.6	16.6
	ポーランド	16.7	21.0	30.9	33.3	35.4	33.7	33.6	30.5
	スロバキア	*	*	11.5	13.9	19.3	21.3	20.5	22.2
	プラハ空港	1.9	1.8	1.2	0.6	1.1	2.6	3.2	3.5
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

*) データなし。

注) 1994年と1995年8月までの期間、スロバキア国境との鉄道移動は含まない。

資料：チェコ統計年鑑および Český Statistický Úřad 2000a。



第14図 チェコ人による外国旅行数の月別変動 (1999年)

注) 各月の変動係数 = $100 \times (\text{当該月の訪問客数}) / ((\text{年間訪問客数}) / 12)$

凡例は出国した国境を示す。

資料：Český Statistický Úřad 2000a。

それほど大きな月別変動がみられない。ドイツの場合には夏季にややピークがあるものの、ポーランドの場合には同様のピークが春と秋にも存在する。これは、ポーランドおよびドイツについては、頻繁に訪問していることをあらわしているのであろう。とくにポーランドについては、2000年現在、チェコに比べて物価が安く、また品揃えも異なることから買い物のための訪問が多い。こうした外国旅行の交通手段に注目すると、93%が道路交通に依存する。すなわち自家用車またはバスによる移動である。残りの数パーセントを鉄道と空路ではほぼ半分ずつ占めている。

チェコ統計局では1997年から、4泊以上の旅行（休暇旅行）に関する抽出調査を実施している（Český Statistický Úřad 1999b）。これによると、1997年では、少なくとも1回以上の休暇旅行を行った人数は510万人、1998年では488万人に達する。チェコ人口は2000年で約1千万であるので、国民のほぼ半数が休暇旅行に出かけている。のべ旅行数は1997年では800万、1998年では746万であった。こののべ旅行数を単純に国外出国者数と比較すると、のべ4000万人の国外出国者に対して、休暇旅行の割合はその5分の1を占めるに過ぎない。すなわち、4日以内の宿泊旅行および日帰り旅行が大多数になる。

チェコ人の休暇旅行に関する調査から把握できる休暇旅行者および休暇旅行の特徴を述べる。クライ別では、プラハで休暇旅行密度（休暇旅行者数／居住人口）が最も高く80%台後半に達する。また農村地域よりも都市地域で高く、都市住民が休暇旅行に出かける割合が高い。同様に収入が多いほど、多くの人々が休暇旅行を行っている。時期では、7月と8月に著しく集中しており、夏期休暇を利用した休暇旅行が非常に多い。この2か月で休暇旅行数全体の7割を占めている。交通手段では、6割を自家用車が、2割をバスが占めており、ややバスが多いことが特色であろう。滞在場所に注目すると、1998年において最も多いのは親戚・知人宅での滞在で24%を、次いで自己所有の別荘が15%を、ホテルが14%を占める。こうした結果を反映して、旅行会社の利用者は2割に過ぎない。滞在期間は5日から7日という最も短いカテゴリーで53%、次いでその次に長い8日から14日で33%に達する（1998年）。このように、滞在期間が短いことが特徴である。また休暇旅行中に行う活動としては、時期とも関連して海水・湖水浴が最も多い（36%；1998年）。もちろん、こうした活動が行われる場所はほとんど国外である。次いで、自己別荘でのレクリエーション（18%）、ハイキング・登山（12%）、親戚・知人訪問（12%）となっている。

次に休暇旅行の目的地について分析する。第11表はチェコ人による休暇旅行の目的地について示したものである。国内旅行が最も多く、70%程度を占めている。クライ別にみると、山岳観光地をかかえる南ボヘミアと東ボヘミアでやや多い。一方、国外ではクロアチア、イタリア、スペイン、ギリシャといった地中海沿岸諸国を目的地としている場合が多い。さらに、スロバキアへの訪問も多い。一方、出国者数で多かったポーランド、ドイツ、オーストリア（第10表）への休暇旅行は少なくなっている。

チェコ人による外国旅行数を明らかにしたものとして、旅行会社を利用した旅行者数のデータも存在する。これは旅行会社を通じて、宿泊施設や交通手段を確保して旅行に出かけた人数を示している（第12表）。この数値は休暇旅行数全体の約2割を占めている。また、3泊以内の旅行も含まれてい

第11表 チェコ人による休暇旅行の目的地（1997・1998年）

目的地		旅行数（単位 1000）		目的地別割合（％）	
		1997	1998	1997	1998
チェコ国内	プラハ	47.2	55.0	0.6	0.7
	中央ボヘミア	810.8	747.9	10.1	10.0
	南ボヘミア	1,081.0	1,021.4	13.5	13.7
	西ボヘミア	621.6	528.6	7.8	7.1
	北ボヘミア	686.7	532.3	8.6	7.1
	東ボヘミア	856.4	917.5	10.7	12.3
	南モラビア	768.5	790.4	9.6	10.6
	北モラビア	673.1	752.3	8.4	10.1
	小計	5,545.3	5,345.4	69.3	71.7
外国	クロアチア	549.9	524.9	6.9	7.0
	スロバキア	382.7	372.0	4.8	5.0
	イタリア	360.5	326.8	4.5	4.4
	スペイン	284.9	190.8	3.6	2.6
	ギリシャ	182.2	155.4	2.3	2.1
	フランス	168.7	113.4	2.1	1.5
	オーストリア	66.7	70.0	0.8	0.9
	ドイツ	113.6	63.2	1.4	0.8
	その他	346.6	293.2	4.3	3.9
	小計	2,455.8	2,109.7	30.7	28.3
	合 計	8,001.1	7,455.1	100.0	100.0

注）チェコ人による4泊以上の休暇旅行のみの集計値である。

外国は上位8か国のみ表示した。

資料：Český Statistický Úřad 1999b.

る。この結果は、4泊以上の休暇旅行全体を示した結果（第11表）とはやや異なっている。すなわち、スペイン、イタリア、ギリシャ、フランス、チュニジア、トルコといった遠隔諸国への旅行の際に、旅行会社が頻繁に利用されている。すなわち、こうした遠隔地域では個人的な予約は困難で、そのため旅行会社が利用されているのであろう。そうした目的地への旅行では、その滞在期間が1週間以上と長い。一方、ドイツ、ポーランドおよびオーストリアといった隣接諸国では、滞在期間が極端に短い。

次に、休暇旅行の支出額について検討する。休暇旅行あたりの平均支出額は、1998年で7181コルナ（1コルナは約3円；2001年1月）であった。国内旅行の場合には、4541コルナ、国外旅行では13564コルナである。後者の国外旅行の場合でも日本円にして約4万円と非常に少ない。オーストリア人による休暇旅行の平均支出額は1996年で1.4万シリング（約11.5万円；レートを1シリング8円として）であること（呉羽 1999）と比べると、明白である。すなわち、休暇旅行の滞在場所として、国内では自己所有の別荘が、国外では親戚・知人宅、さらには全体的に安価な宿泊施設が採用されており、支出が低く抑えられている。また、自家用車や安価なバスで移動することによって、交通費を安くしている。

チェコ住民の外国旅行の規模は、ヨーロッパ諸国のなかでも比較的大きい（呉羽 2000）。チェコ人

第12表 チェコ人による旅行会社を利用した外国旅行者数の推移（1995～1999年）

指標	目的国	1995	1996	1997	1998	1999
旅行者人数 (人)	スペイン	175,183	163,904	160,031	135,642	271,743
	クロアチア	86,721	270,994	400,117	313,614	244,362
	イタリア	379,053	393,652	302,613	276,116	239,548
	ギリシャ	101,605	147,544	148,925	249,240	179,777
	フランス	75,785	82,668	100,906	81,842	96,279
	オーストリア	96,521	96,977	164,514	101,310	91,741
	チュニジア	15,142	17,740	21,658	34,953	57,704
	スロバキア	31,959	36,553	42,852	28,475	41,569
	ドイツ	64,615	50,077	51,382	31,399	38,755
	トルコ	43,229	39,444	13,548	26,685	27,838
	ハンガリー	4,895	5,873	16,030	6,313	25,591
	イギリス	33,537	44,137	33,933	17,576	16,142
	スイス	27,789	16,767	21,191	13,382	15,730
	ブルガリア	11,892	16,055	35,326	10,024	14,955
	ポーランド	66,924	50,286	40,824	19,302	12,141
	その他	87,063	75,668	87,600	117,001	117,877
	合計	1,301,913	1,508,339	1,641,450	1,462,874	1,491,752
平均滞在日数 (日)	スペイン	8.7	8.9	8.3	8.7	9.0
	クロアチア	8.6	8.3	9.6	7.9	8.3
	イタリア	8.5	7.5	7.8	7.7	7.5
	ギリシャ	10.2	9.9	10.4	12.7	10.1
	フランス	5.8	6.9	6.8	7.0	6.6
	オーストリア	3.0	3.0	2.3	3.7	3.9
	チュニジア	9.3	8.6	8.5	11.3	9.3
	スロバキア	6.7	6.5	6.8	6.7	5.6
	ドイツ	2.4	2.0	3.4	2.3	2.2
	トルコ	7.3	10.4	9.0	12.1	8.1
	ハンガリー	4.1	5.6	6.5	6.1	5.4
	イギリス	5.9	4.9	5.7	6.1	6.9
	スイス	4.2	5.5	7.8	5.1	5.2
	ブルガリア	11.1	12.1	12.5	10.3	9.1
	ポーランド	1.4	1.4	1.7	2.1	2.0
	合計	7.1	7.3	7.7	8.3	7.8

注) 1999年において、上位15位までの目的国を示した。

資料：チェコ観光局（原データはチェコ統計局）データおよびČeský Statistický Úřad 2000b.

による外国旅行数は、1997年に約4500万で、ヨーロッパ主要国内でドイツ、イギリスに次いで第3位である（Euromonitor 1998）。また平均旅行回数は4.3回で、ドイツを上回っており、頻繁に外国旅行がなされている。しかしその一方で、その支出額は非常に少なく、ヨーロッパ内では最低レベルにある。したがって、外国旅行の回数は多いものの、短期で比較的近隣地域への旅行が多いのである。また、国外への出国者が近年減少していることから、国内に存在する自己所有の別荘や安価な宿泊施設が休暇の場所として、近年重要な役割を演じてきているといえよう。こうした個人所有別荘の貸借もチェコ人のあいだでは頻繁に行われている。

VI ま と め

本研究の目的は、統計資料を用い、チェコにおけるインバウンド・ツーリズムとアウトバウンド・ツーリズムの実態を明らかにしてきた。その結果は以下のようにまとめられる。

チェコでは、改革以前は外国人観光客のほとんどは旧共産圏諸国、とくに東ドイツ、ポーランドおよびハンガリーから訪れていた。改革以後になると、西側諸国からの旅行者が急激に増加した。その際、ドイツ人が非常に大きな地位を占めている。これはドイツと国境を接するという位置的な関係が影響したものであろう。ドイツはヨーロッパのなかでも最大の外国旅行市場国である。また旧東ドイツ住民の多くが、共産主義時代にチェコを訪れ、その名残りもあると考えられる。訪問客のほとんどは宿泊施設を利用していない。すなわち、日帰り客がかなり大量に存在し、また親戚や知人宅に滞在する人が多いことに起因するのであろう。しかし、より本質的には日帰り観光が中心になっていると考えられる。

改革以後、宿泊施設を取りまく状況は大きく変化した。それまで、利用者のほとんどはチェコ人と旧共産圏諸国の住民であり、設備の整備はそれほど進んでいなかった。しかし、改革以後旧西側諸国から多くの観光客を抱えることになった結果、さらには資本主義経済の導入とともに宿泊施設も民営化されたことによって設備の改良が急激に進み、さらに新たに多くのホテルも建設された。とくに中堅クラスのホテルの施設・ベッド数ともに増加が目立った。

チェコにおける宿泊客は、プラハに著しく集中している。この傾向は改革以前から変化がないが、改革以後は西側からの観光客が増えた結果、プラハへの集中傾向は強まってきた。プラハ以外では国内第2位の都市であるブルノ、西ボヘミアの温泉地および山岳観光地クルコノシェで多くの宿泊客がみられた。とくにプラハ、カルロヴィ・ヴァリを中心とした西ボヘミアの温泉地では、外国人宿泊客が卓越している。一方、こうした観光地以外では、一般に観光客も少なく、さらにチェコ人による利用が中心となっている。チェコには、さまざまな観光資源が存在する。しかし、ハンガリーのバラトン湖のような湖沼資源に乏しく、また山岳資源には恵まれているものの概してその山塊は低くアルプスやスロバキアのタトラに比べると魅力が小さいといわざるを得ない。その結果として目下のところ外国人観光客は首都プラハに著しく集中している。さらには隣接諸国からは多くの訪問客があるものの、日帰り形態が多く宿泊客は少ない状況にあるといえよう。

一方、チェコ人による旅行行動は、社会主義時代にはその数も少なく、目的地もほぼ社会主義ブロック内で完結していた。国外では、とくにハンガリー、東ドイツ、ポーランドへの旅行が多かった。また国内旅行も多く、その際、自己所有の別荘が滞り場所となった。旅行行動も改革以後大きく変化した。外国旅行数の規模は、ヨーロッパ内でも上位に位置するほど増大した。内陸国でまた面積的に狭い国であるという条件が大きく影響していると考えられる。とくにポーランドへの買い物目的の移動が著しい。目的地も大きく変化し、ドイツやオーストリアといった隣接国に加え、スペインやフランスにまで旅行に出かけている。しかしながら、休暇旅行全体では7割も国内旅行が占めた。また、チェコ人による旅行支出は非常に少ない。それは、交通費や宿泊費を安くおさえているためである。すな

わち、自家用車やバスで移動し、自己の別荘や親戚・知人宅に滞在する形態が目立った。

インバウンド・ツーリズムとアウトバウンド・ツーリズムを比べると、チェコでは移入超過である。これはチェコに比べより多くの人口規模を有する隣接国、とくにドイツとポーランドから多くの訪問者が存在するためである。しかしながら、近年、インバウンド・ツーリズム、アウトバウンド・ツーリズムともに大きな変化はなく推移している。東欧改革の直後には、両者とも急激に増加するといった変化がみられたものの、それから数年が経過し安定しつつあるとも把握できるが、減少傾向にあるとみることもできる。社会主義時代には、西側住民にとってのチェコ、逆にチェコ住民にとっての西側諸国は、ほとんど訪れることができない地域であった。この制約は、東欧改革とともに消滅した。その結果、急激に旅行が増加したと考えられる。しかし、近年その流行は停滞している。チェコへの外国人旅行者数、チェコ人による外国旅行数ともに減少を示している。同時にチェコ人による国内観光も多い。また、物価較差に基づいた現象も急激に出現した。西側住民にとっては、チェコは物価が安い国として捉えられた。その結果として、チェコにおいて日帰りツーリズムの発展が進んだ。またチェコ人にとっても安価な旅行が選択されている。しかし、近い将来チェコがEU加盟を果たすと、こうした物価較差に基づいた旅行は減少すると思われる。こうした変化も今後分析していく必要がある。

本稿は、平成8～10年度文部省科学研究費補助金（国際学術研究・学術調査）「中央ヨーロッパにおける市場経済化の進展と地域構造の変化－旧東ドイツ・ポーランド・チェコ・スロヴァキア・ハンガリーの事例－（代表者：小林浩二；課題番号：08041053）」および平成11～12年度文部省科学研究費補助金（基盤研究A2）「中央ヨーロッパにおける地域構造と生活様式の変化－ポーランド・チェコ・スロヴァキア・ハンガリーの事例－（代表者：小林浩二；課題番号：11691070）」の成果の一部である。現地において、貴重な助言・協力をいただいたカレル大学のJ. Vagner博士とI. Bičík教授、西ボヘミア大学のJ. Ježek講師とJ. Hofman博士、バイロイト大学のJ. Maier教授、オーストリア東・南東ヨーロッパ研究所のP. Jordan博士に深く感謝いたします。なお本研究の一部は、1997年日本地理学会春季学術大会（東京都立大学）、1999年日本地理学会春季学術大会（専修大学）および2000年日本地理学会春季学術大会（早稲田大学）で発表した。

参考文献

- 梅津和郎（1997）：チェコ経済の主役としての観光産業。梅津和郎編『新ヨーロッパ現代史－大欧州への道－』109-112, 創成社。
- 加賀美雅弘（1997）：『ハプスブルク帝国を旅する』講談社。
- 呉羽正昭（1997a）：中央ヨーロッパ東部における観光の変化。日本地理学会発表要旨集 51, 234-235。
- 呉羽正昭（1997b）：中央ヨーロッパ東部地域住民の観光パターンの変化に関する一考察。愛媛の地理 13, 25-33。
- 呉羽正昭（1997c）：オーストリアにおける中欧東部地域からの宿泊客の滞在パターンとその変化。愛媛大学法文学部論集・人文学科編 3, 123-139。
- 呉羽正昭（1998）：ハンガリーにおける観光客と観光地域の変化－観光統計を用いた分析－愛媛大学法文学部論集 人文学科編 5, 121～142。
- 呉羽正昭（1999）：東欧改革に伴うオーストリア人の旅行パターンの変化。愛媛の地理 14, 49-60。
- 呉羽正昭（2000）：ヴィシエグラード諸国における観光の変化。小林浩二・佐々木博・森和紀・加賀美雅弘・山本充・中川聡史・呉羽正昭共編著『東欧革命後の中央ヨーロッパ－旧東ドイツ・ポーランド・チェコ・スロヴァキア・ハンガリーの挑戦－』57-74, 二宮書店。
- 中村泰三（1987）：『東欧圏の地誌』古今書院。
- 山本 茂（1997）：『今ひとたびの東欧－東ヨーロッパ地域研究－』開成出版。
- Carter, F.W. (1991): Czechoslovakia. In *Tourism and*

- economic development in Eastern Europe and the Soviet Union*, ed. D.K. Hall, 154-172, London: Belhaven.
- Bičík, I. (1996): Statute and perspectives of secondary lodging in the surrounding of Prague. In *Transformation processes of regional systems in Slovak Republic and Czech Republic*, ed. J. Mládek, 181-188, Bratislava: Univerzita Komenského.
- Bičík, I. and Fialová, D. (1997): Second homes: case study Kocába region. *Acta Universitatis Carolinae, Geographica, Supplementum*, 32, 247-253.
- Euromonitor (1998): Europeans abroad. *Market Research Europe* 1998/11, 25-50.
- Johnson, M. (1995): Czech and Slovak tourism: Patterns, problems and prospects. *Tourism Management* 16, 21-28.
- Moos, L.A.G., Tesitel, J., Zemek, F., Bartos, M., Kusová, D. and Herman, M. (2000): Tourism in bioregional context: Approaching ecosystematic practice in the Sumava, Czech Republic. In *Tourism and development in mountain regions*, ed. P.M. Godde, M.F.Price and F.M. Zimmermann, 85-113, Wallingford: CAB.
- Poser, H. (1939): *Geographische Studien über den Fremdenverkehr im Riesengebirge*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Simpson, F. (1999): Tourist impact in the historic centre of Prague: Resident and visitor perceptions of the historic build environment. *Geographical Journal* 165, 173-183.
- Vystoupil, J. (1993): Tschechoslowakei, Teil I. In *Perspektiven des Fremdenverkehrs im östlichen Mitteleuropa*, hrsg. P. Jordan, und E. Tomasi, 27-36, Wien: Arbeitskreis für Regionalforschung.

統計類

- Český Statistický Úřad (Czech Statistical Office) (1993-1999): *Statistická ročenka České Republiky (Statistical yearbook of the Czech Republic)*. Praha.
- Český Statistický Úřad (1996): *Návštěvnost v ubytovacích zařízeních cestovního ruchu v roce 1995 (Number of guests in tourist lodging facilities 1995)*. Praha.
- Český Statistický Úřad (1999a): *Kapacita ubytovacích zařízení: 31. 7. 1999 (Capacity of accommodation establishment: 31 July 1999)*. Praha.
- Český Statistický Úřad (1999b): *Cestování v roce 1997 a 1998 (Travelling in 1997 and 1998)*. Praha.
- Český Statistický Úřad (2000a): *Zahraniční cestovní ruch: Pročinek 1999 (Foreign tourism: December 1999)*. Praha.
- Český Statistický Úřad (2000b): *Činnost cestovních kanceláří za rok 1999 (Activities of travel agencies in 1999)*. Praha.
- Český Statistický Úřad Homepage: <http://www.czso.cz/> (2000年8月から2001年1月にかけて参照)
- Federalni Statistický Úřad, Český Statistický Úřad, Slovenský Statistický Úřad (1990-1992): *Statistická ročenka České a Slovenské Federativní Republiky*. Praha.
- Statni Úřad Statisticky, Československé Socialistické Republiky (1970-1989): *Statistická ročenka Československé Socialistické Republiky*. Praha.

Changes of Inbound and Outbound Tourism in the Czech Republic Through the Velvet Revolution

Masaaki KUREHA

The tourist flow in the Central Europe has dramatically changed through the political and economic restructuring in the former Eastern Countries since 1989. Between 1950 and 1989, the European had few chance to cross the Iron Curtain on each direction, because of political and economic reasons. After the Eastern European Revolution 1989, however, the quite new form of tourism came into existence in the Central Europe. We could discuss these changes from two points. First, the number of tourists has rapidly increased in the former Eastern European Countries, especially that from the western part of Europe. Second, travel activities of the peoples in the former Eastern Europe have also changed. This study attempts to discuss these problems in the Czech Republic. Namely this paper aims to examine the changes in inbound and outbound tourism in the Czech Republic after the Velvet Revolution. The author analyses two points with the statistic materials by the Czech Statistical Office: the changing form of inbound tourism to the Czech Republic by international tourists, and the changing form of travel activities of the Czech people.

During the totalitarian period most of tourists to Czechia came from the Eastern Block Countries, especially such as East Germany, Poland and Hungary. The number of foreign tourists from the Western Europe dominated only a few percent. This form of international tourism in Czechia has rapidly changed since 1989. The number of tourists has greatly increased. Many tourists from the Western Countries have come to the Czech Republic. German tourists visit the Czech Republic most often because of the accessibility. In many regions in Czechia old lodging facilities have been renewed thorough the privatization and many accommodations have newly been established since 1989. It is distinctive that there were many new opening of middle classed hotels. Foreign tourists strongly concentrate on the capital Prague, which has many historical and cultural buildings. There also are many foreign tourists at some spa resorts in West Bohemia, such as Karlovy Vary, and Brno, a center of Moravia region. Most of foreign tourists, however, stay in Czechia only one day for shopping.

The international travel activity of Czech people remained small between the socialist period. The peoples in Czechia tended to do their travel only within the former Eastern Block, such as East Germany, Poland and Hungary. It was normally impossible for them to go to the western part of Europe, because of the difficulty to buy foreign currency and to get visas. The Czech people also had many holidays at their second houses located surround the large cities. After the political and economic transformation since 1989, the number of foreign travels increased rapidly and the destination of their trips extremely changed. The quantity of international tourists of Czech people has become one of the most one in Europe. Many Czech people rushed to go not only to Germany and Austria, but also Spain, France and Greece. However, the domestic tourism by the Czech people has also dominated.

Inbound tourism is surpassing outbound tourism in the Czech Republic. There are few rapid changes in the both forms of tourism today, while the number of foreign tourists to Czechia and international traveler of Czech people had increased since directly after the Velvet Revolution.

Although the market economy has been infiltrating in the Eastern Europe since 1989, there still are differences within items and price on the market not only between the western and eastern parts of Europe, but also between some former Eastern Countries. Most of the tourism today depends on shopping based on economic situation. Because the differences will have become smaller, it will be recognized that the form of tourist flow will change in the 2000s.

Key words: international tourism, domestic tourism, tourist accommodations, tourist area, Czech Republic, Velvet Revolution

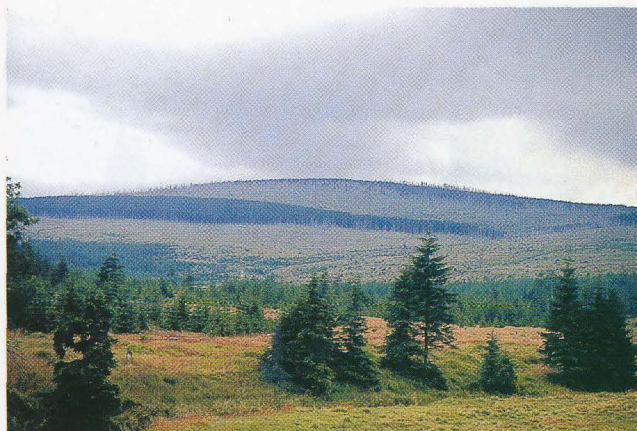


写真1 クルコノシェの山地景観

山地というよりはなだらかな丘陵が続いている。夏はハイキング、冬はスキーのメッカとなる。一部の地域では酸性雨の影響で森林破壊が進んでいる。

(1996年8月撮影)



写真2 プラハ南部のヴルタヴァ川

プラハ南郊のスラピー Slapy では、ヴルタヴァ川で水辺のスポーツが盛んに行われている。ヨットハーバーも設けられている。個人所有の別荘も非常に多い。

(2000年7月撮影)



写真3 カルロヴィ・ヴァリの中心部

豪華なホテルや商店が建ち並んでいる。広場も多く、保養客や観光客が散歩を楽しんでいる。

(2000年7月撮影)



写真4 マリアーンスケー・ラーズニェ

マリアーンスケー・ラーズニェの温泉源泉の建物。豪華な建築物内部には、飲食店や商店が入居している。

(2000年7月撮影)



写真5 フランチシュコヴィ・ラーズニェ

西ボヘミアの3大温泉地のなかでも、規模は最も小さい。3階建ての建物で中心で、ほとんどが黄色に着色されている。

(1998年8月撮影)



写真6 プラハの景観

南から北に流れる（写真では右から左）ヴルタヴァ川の両岸に市街が発達している。戦災を逃れ古い建物が多く残されている「百塔のまち」である。多くの建物の屋根が赤茶色で統一されている。

(2000年7月撮影)



写真7 プラハのカレル橋

15世紀に完成したプラハ最古の石橋。ヴルタヴァ川で隔てられていたプラハの旧市街地と王宮を結んでいた。現在では、非常に多くの観光客が往来し、夏季には混雑している。

(1997年8月撮影)

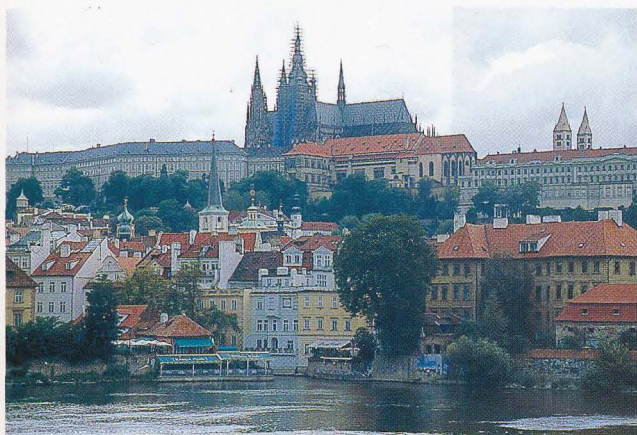


写真8 プラハ城

14世紀、カレルIV世の時代に現在の姿になった。城壁に囲まれた広い敷地を有し、内部には王宮や教会があった。尖塔は聖ヴィート教会である。手前はヴルタヴァ川。

(2000年7月撮影)



写真9 ロケット城

カルロヴィ・ヴァリの南西部約10kmに位置するロケット Loket の石城。内部には考古学的な展示と城の歴史を説明した博物館がある。城の傷みも激しく、修復が進んでいる。

(2000年7月撮影)



写真10 プラハ南郊の別荘1

プラハの南約30kmに位置する森林地帯内の別荘。社会主義時代に例外として、個人所有の別荘が許可されていた。プラハ市民の多くがその南郊に別荘を所有している。いくつかの別荘が共同で、テニスコートを設けるなど、共同体的な性格がみられる。

(2000年7月撮影)



写真11 プラハ南郊の別荘2

プラハの南約30kmに位置するヴァルタヴァ川沿いの別荘。ここではウォーター・スポーツが盛んである。しかし、道路、電気、上下水道といったインフラ整備が遅れている。

(2000年7月撮影)



写真12 ブルノの中心広場

ブルノはモラヴィア地方の中心都市で、郊外も含めるとその人口は50万に達する。広場では市がたっている。ブルノは国際見本市が年数回開催される商工業都市である。

(2000年7月撮影)